

フェミニズムが変えたこと、変えられなかったこと、そしてこれから変えること

第1部 | 基調報告

小川 たまか氏 (ライター)、酒井 順子氏 (エッセイスト)、田中 美津氏 (鍼灸師)

第2部 | パネルディスカッション

コーディネーター：佐藤 文香氏 (一橋大学大学院社会学研究科教授)

総括：上野 千鶴子氏

(東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN) 理事長)

2020.9.23 (水) 17:30-20:30

Zoomウェビナーによるオンライン開催

主催：立教大学ジェンダーフォーラム

共催：認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (WAN)

境磯乃：ただ今より、立教大学ジェンダーフォーラム主催、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク (以下、WAN) 共催による公開講演会「フェミニズムが変えたこと、変えられなかったこと、そしてこれから変えること」を開催いたします。本日司会を務めさせていただきます、WANの境磯乃と申します。どうぞよろしくお願いたします。

それでは開会のあいさつに移ります。この企画の実行委員長であり、立教大学社会学部教授である萩原なつ子先生、よろしくお願いたします。

萩原なつ子：皆さま、こんばんは。実行委員長の萩原と申します。立教大学とWANの共催のシンポジウムに、本当に多くの方にご参加いただきましてありがとうございます。そして貴重な報告とディスカッションをお願いしております登壇者お一人お一人にも厚くお礼申し上げます。

本来であれば5月に、今、画面の背景に映っている立教大学のタッカーホールでの開催を予定し

ておりましたけれども、新型コロナでやむなく延期になっておりました。でも本日このように、オンラインではありますが開催できましたことを大変嬉しく思っています。タッカーホールにいる気分を味わっていただきながら、長時間にはなりませんが、最後までお楽しみいただければと思います。皆さま方のご協力に心から感謝申し上げます。開会のあいさつに代えさせていただきます。どうぞよろしくお願いたします。

境：ありがとうございます。続きまして、主催の立教大学ジェンダーフォーラムの所長である片上平二郎先生、ごあいさつをお願いいたします。

片上平二郎：立教大学の片上と申します。よろしくお願いたします。萩原先生がお話されたようにタッカーホールでの開催は叶いませんでしたが、結果的にはオンラインでの開催になったことで、より大きな規模で、しかも対面では参加できなかったような遠方からも参加できるようなかたち

となり、逆にラッキーだったかもしれないという気分です。勿論、いつかは、対面でまた同じようなイベントができる機会を探りたいとも思っています。

WANは2009年5月に発足し、立教のジェンダーフォーラムも1998年4月に設立されたので、ちょうど10周年、20周年を超えたところでこういうかたちと一緒にイベントができたことは、とても嬉しく思っています。また、ジェンダー問題を考える、フェミニズムを今後どう考えていくかという主旨のイベントを立教で開催できることも、とても誇らしく思っています。

その一方で今日の登壇者のうち、酒井順子さんと小川たまかさんのお2人が立教大学出身ですが、日頃、立教でいろいろ活動していると、ジェンダー問題についてあまり敏感だとは感じられないような場面に遭遇することもまだにあります。そういう場所でジェンダーフォーラムという組織が長く続けられていること、および大学を卒業した後に酒井さんや小川さんのような人が活躍されているということは、ある種ちょっと謎なところがありますが、だからこそ立教でこういうイベントをやる意味を今後も考えていきたいと思っています。それではよろしくお願いいたします。

境：ありがとうございます。これより第1部：基調報告に入ります。基調報告では30代、50代、70代の3名の方に、それぞれで自身がこれまでに変えてきたことや、変えられなかったことを語っていただきます。

ではお1人目、小川たまかさんをご紹介します。小川さんは1980年のお生まれで、立教大学大学院を修了されています。ライターとして性暴力被害、痴漢犯罪、年齢差別、ジェンダー格差、女性蔑視CM、#MeTooといったジェンダー問題を取材し、発信し、声を上げておられます。また「性犯罪をなくすための対話」の運営をされています。著書には『「ほとんどない」ことにされている側から見た社会の話を。』（タバブックス、2018）があります。小川さん、よろしくお願いいたします。

小川たまか：こんにちは。ライターの小川と申します。よろしくお願いいたします。私は今ご紹介にありましたように、30代の代表というかたちで今日はお話をさせていただくことになっているんですが、実は1980年の11月生まれで、あと2ヶ月で4代になってしまうので、30代ぎりぎりです。今日参加できて良かったというか、もつと長く延期にならなくてよかったなと思っています。

立教大学には1999年に入学して、2003年まで文学部の日本文学科にいました。2003年から2006年までは、大学院の文学研究科で渡辺憲司先生のもと近世文学、江戸文学の研究をしていました。振り返ってみると7年間も立教にいたので、長い学生生活でした。それでも全然出来のいい学生ではなかったんで、今日こんなところに呼んでいただいととても驚いているのと同時に、嬉しくも感じています。

立教の思い出としてジェンダーに絡むものが1つあって。1999年の入学式の時に、立教のあまり広くはないキャンパスにサークルや体育会への新入生の勧誘がずらつと並んでいました。そこで新入生はみんな声を掛けられるんですけど、そこであるサッカーサークルから、「僕たちのサークルは男子20人、女子マネ20人で活動しています」と声を掛けられて、それを聞いた時に私はすごくびっくりしてしまつて。高校の時も女子マネジャーはいましたが、男子メンバーが30人いたら女子マネ2人とか、そういう感じだったので、大学になるとワン・オン・ワンで女子マネジャーがつくのかと、そんなすごいところに来てしまつたのか私は！と一体どうしたらいいんだろうと訳が分からなくなって、女子だけで活動している女子ラクロスというサークルがあったので、そこに反動で入ってしまいました。

今、立教のラクロスって、多分とても強いですよ。でも私が入った当時は、まだ強くなりかけの途中ぐらいで、体育会でもなくサークルだったので、そこまでスポーツが得意ではなかった私でもついて行けて、4年間ずっとラクロスをやっていました。そんな思い出があります。今日見てく

ださっている方、立教の学生さんもかなり多いということなので、もしラクロスの方がいたら嬉しいなと思っています。

私は、大学を卒業してからライターをやる中で、自然とジェンダーの問題について取材をすることが多くなっていきました。何で自分がそこに興味があるのかなと考えてみると、一つ大きかったのは共働き家庭に育ったということだと思っています。先ほども言ったように私は1980年生まれなのですが、80年代前半は、まだ共働き家庭と専業主婦家庭では共働き家庭の方が少ない時代でした。私は保育園に通っていたんですが、共働き家庭で保育園に通っている子どもは——都内の私の周りだけそうだったのかもしれませんが——どちらかという貧困家庭というか、家庭に事情がある。専業主婦家庭が普通の家庭で、共働き家庭はちょっと特殊な事情のあるお家というふうに見られていたなと記憶しています。立教は私立の大学で、今はどうだか分からないのですが、私が通っていた頃は、お友達もやっぱり専業主婦家庭で育ったという学生が多くて、共働きのお家だったという子がいたかなというぐらい、あまり記憶がないです。

立教の大学院を出て、私はすぐフリーランスのライターになって、それから編集プロダクションを共同経営者と一緒に立ち上げて、そこで10年やって、またフリーランスに戻りました。2006年に卒業してライターをやろうと思った頃に、もう既にその当時、出版不況と言われていて、若手にどんなところに仕事があるかと思ったらネットの仕事でした。なので、ライターとしてデビューした頃から、仕事の7~8割ぐらいがインターネットでした。皆さんもご承知だと思いますが、インターネットは良くも悪くもダイレクトに読者の方からの反応が分かる。嫌なことも勿論言われるし、いい反応も時にはもらえるというような感じです。

私がすごく記憶に残っていることが幾つかあるのですが、そのうちの1つが、2013年から2014年の頃に、自分が共働き家庭で育ったこともあつ

て、働く女性を応援するような記事、働きながら子どもを育てている女性の応援をするような記事や、待機児童の問題について書いている時に、今もですけど、当時すごく反発があった。どういう反発かというと、共働きの家の子どもはかわいそうだとか、子どもが小さいうちは母親が必要、父親ではなくて母親が絶対に必要なんだ、だから保育園に子どもを預けて働くなんていうのは女性のわがままだというような、そういう反応をいただくことがかなりありました。ある時、Yahooニュースのトップページに私の待機児童に関する記事が載った時に、Facebookのダイレクトメッセージに100通近いクレームというか、ほとんど中年の男性からだったのですが、「保育園に預けたい女性を応援するような記事は書くな」とか、もしくは「あなたが言っているような女性差別なんて、もう今はないんですから、そういうことを言うのはやめてください」とか、そういうのがバーツと来たことがありました。

でも一方で、子どもを保育園に預けているお母さんたちから、「書いてくれてありがとう。本当に涙が出るぐらい嬉しかったです」とか、そういう反応もあつたりして、両方の反応を受けながら記事を書いていました。それが2013年、2014年頃のことです。2016年にSNSで「保育園落ちた日本死ね」というブログを書いた方がいて、これがすごく話題になって国会でも取り上げられるに至って、ようやく待機児童の問題が少し広まり、今でも解消されてはいませんが、最近では「働きたいなんて女のわがまま」みたいなことを言う人は、さすがに少なくなってきたのかなと思っています。

また、2015年からは性暴力の問題について記事を書き始めました。これを書き始めたきっかけもネット上にあります。ある時ネットで、若いWebライターの男性がアンケートを基に記事を書いていました。そのアンケートは、女性専用車両は必要だと思うかどうかを女性に対して調査したもので、20代から60代までの女性の回答が年代別に出ていました。そこで60代の女性も7~8割が女性専用車両を必要だと思っているという結果につ

いて、そのWebライターが何と書いていたかという、「痴漢も人を選ぶと思いますけれどね」と。「60代も7割が女性専用車両必要だなんて、60代なんて痴漢に遭わないくせに、遭うと思ってるんですか」というようなことを書いていました。

そういう被害者を冷やかすようなコメントは、ネット上に本当にたくさんあるんですが、自分と同じWebライターがこういうことを書いているのを私はとても許せなくて。それから自分が小学校の頃や高校の頃に遭った痴漢被害のことをブログに書いたんです。そしたらそのブログにすごく反響があつて、自分も被害に遭っていたとか、自分の娘が被害に遭って裁判をしましたとか、自分の友だちが、「今痴漢してきた」と笑いながら話していたのがすごく怖くて逃げましたという男性からとか、いろんな反応があつて、この痴漢の問題を私は深く取材してみようと思つて、それから性暴力の取材を始めました。

ただ、痴漢の問題も書いてみると、「書いてくれてありがとう」という反応もいただく一方で、やっぱり「痴漢冤罪のほうが問題だ」とか、「男を全部痴漢扱いするな」とか、「女性専用車両は男性差別ですよ」とか、そういう反発があります。さらに女性からも「私は性暴力に遭ったことがないから関係ないです」みたいな反応があるのですが、でも「じゃあ痴漢に遭ったことないんですか」と話を聞いてみると、「痴漢ぐらいならあるけれど、痴漢って性暴力なんですか」といった状態で、女性の中にもまだ性暴力について語りづらいつつとか、語る言葉を持っていない人も多いんだなという実感がありました。

過去のことを調べてみると、80年代には「スレスレ痴漢法」という特集が雑誌で組まれたことがあり、しかもいわゆるエッチな雑誌ではなく、普通のビジネスカルチャー誌でそれが行われていました。牧野雅子先生の『痴漢とはなにか』(エトセトラボックス、2019年)に詳しく出てきます。また、80年代後半には、大阪で「御堂筋事件」という、痴漢を注意した女性が電車から引きずり降ろ

されて強姦されるという事件がありました。その事件に女性たちがたくさん抗議をして、鉄道会社に対策を求めるような申し入れをしました。でもその女性たちに対して、お客を痴漢扱いするわけにはいかないとか、「痴漢は犯罪」というポスター一つを掲示するのにも、すごく難色を示されたようです。あるいは80年代、90年代、まだセクハラという言葉ができて始めたぐらいの頃に、「何でもかんでもセクハラ扱いたら、女の子のお尻さえ触れなくなるなんて苦しい」とか、過去のことを調べるとそういう事例が山ほど出てくるんです。

さらに言うとその当時、今よりもずっと性被害への偏見が酷かった頃から、被害者の支援をやってきたのは女性たちで、女性たちが手弁当やボランティアのかたちで、被害に遭った女性やDVから逃げられないでいる女性たちの電話相談を開いたりとか、ケアやサポートに当たっていた。わずかながらの助成金を、たまに出たり出なかつたりする助成金をもらいながら、声なき声といわれる女性たちを支えていた。そういう歴史があることを知つて、国はそうしたケアやサポートの分野をこれまでずっと、今もだと思えるんですけれども女性たちに丸投げして、女性たちの無償労働に頼ってきた部分があると思えました。

それなのに、過去ずっとつないできた女性活動を、あまりマスコミも拾ってこなかつた。#Me Tooやフラワーデモが、最近になって報道されるようになって、日本で初めて#Me Tooが始まったとか、女性たちが初めて声を上げたと言われることもあると思うのですが、本当はずっと女性たちは声を上げていて、それを拾わなかつたメディアが私は結構悪いなと思っています。今、新聞社とかも半数以上が新卒で女性を採用ようになってきて、報じるメディアの側にもようやく女性が増えて、声が拾われ始めたというところが、もしかしたらあるのかもしれませんが。私はやっぱりライターなので、過去の話も聞きながら、今活動している人たちの声も聞きながら、なるべく多くの人を聞き漏らさないようにして、これからもいろんな問題を

取材していきたいと思っています。ちょっと長くなってしまったんですけど、私の発表は以上にしたいと思います。どうもありがとうございました。

境：ありがとうございます。続きましてお2人目の酒井順子さんをご紹介します。酒井さんは1966年生まれで、立教大学をご卒業されたエッセイストです。30歳以上、未婚、子なしの女性を「負け犬」と定義した著書『負け犬の遠吠え』（講談社、2003）で、2004年に婦人公論文芸賞、講談社エッセイ賞を受賞し、流行語大賞にもノミネートされるなど一大論争を起こしました。『百年の女——『婦人公論』が見た大正、昭和、平成』（中央公論新社、2018）、『男尊女子』（集英社、2017）ほか、その時代のその時の自分が感じる、女性としてのありようをつづった著書を多数出しておられます。では酒井さん、よろしく願いいたします。

酒井順子：皆さん、こんばんは。酒井順子です。Zoomでこういった大規模なイベントに参加するのは初めてなので、1人で語りながら、この向こうにたくさんの方がいらっしゃるというのが信じられない思いであります。今日はいろいろな世代の方が集まっている中で50代の代表ということで、まずは少し自己紹介を兼ねて自分の世代的背景を話してみたいと思います。1966年は昭和で言うと41年で、ひのえうま丙午の年なんです。私の年の出生率はその前後と比べて本当にがくっと落ちていて、全体の人数が少ないので、人生においてもあまり激しい競争に晒されずに生きてきた気がします。なおかつ、私が就職をした1989年は昭和が平成になった年ですけども、バブルの只中ということもあって、就職活動でも比較的簡単に誰でも内定が取れたという、いわゆるバブル世代でもありません。さらに言うと1989年の就職は、男女雇用機会均等法が施行されてから3年目か4年目ぐらいだったので、私はいわゆる雇用機会均等法の第1世代ということにもなっています。

私は大学を卒業してから広告代理店に就職しま

したが、その時は丙午とバブルと雇用機会均等法と、いろいろな下駄を履かせてもらうことができました。おかげで私は総合職としてその会社に就職したのですが、それも自分で望んで勝ち取ったというよりは、上の世代の方々が作ってくださった波に乗って、そうなったのかなという感覚を持っています。

エッセイを書く仕事の中では一つの柱として、自分という狭い間口から、その時代、時代の女性の生き方を見るという作品群があります。その辺りからジェンダーですとか、男女の在り方みたいなものについて興味を持つようになってきました。

最初は、ひょんなことから高校時代にエッセイを書くようになったのですが、女子高生というのはこういう暮らしをしているんですよということを書いてみたら、大人たちにすごく受けて、女子高生という属性が売り物になるんだということに気付いたんですね。その感覚は、言うなれば90年代のブルセラの女子高生と同じで、私はブルマを売る代わりに売文していたという、文筆系のブルセラ女子高生でした。

就職の時は均等法が施行されたり、私が就職した年に確かセクハラという言葉が流行語大賞になって、セクハラは一応いけないんだという認識が広まったりということで、昭和までは目に付きやすいところにあつた男女差別が、なくなったわけでは全くないけれど、水面下に潜らせなければいけないという認識が広まった時代でした。その中でいつも私が疑問に思っていたのが、何でも含めて女性は、男性と相対した時に一歩下がったりとか一段降りたりとか、自分を低めずにいられないんだらうということでした。言葉の問題で言ったら、夫のことを「主人」と呼ぶといったことも同じ問題かと思うんですが、私はそういう女性のことを「男尊女子」と呼んでいます。

そのことに一番最初に気付いたのが、小川さんも仰っていましたが、大学に入って最初に感じた女子マネシヨックでした。同級生の女の子の中に、アメフトとかラグビーなど、かつこいい感じの男子の体育会の部の女子マネになりたいという

人がたくさんいて、なぜ彼女達は自分のしたいことをするのではなく、男の人の雑用をしたいのかとすごく疑問に感じていました。でも、彼女たちにとっては本当にしたいことが、男の子を助けるということで、そこに喜びを感じる女子もいるんだということに初めて気付きました。

自分の中に男尊女子感覚が全くないのかというとそうではなくて、男の子にリーダー役をつい任せてしまったりとか、何となく飲み会でサラダを取り分けたりとか、そういう自分もいるわけです。男尊女子成分を取り除くのがとても難しいのはなぜかなと考えつつ大人になりまして、さつきご紹介いただいた『婦人公論』という雑誌の創刊以来100年の歴史を振り返るという機会がありました。大正から今までの女性の歴史を見ると、平塚らいてうさんのような先駆的な人もいますが、男尊女子の歴史も脈々と続いているわけです。そもそも『婦人公論』という雑誌自体が、進んでいる男が劣った女を導いてあげるといった意識から始まっていて、例えば創刊の頃には「婦人といえども人である」みたいなことが書いてある。女も人間だということが、その時点で認識されていなかった上に、男と女の知能は同等ではない、といったことも書かれています。昭和50年代になっても、例えば作家の吉行淳之介さんが「女は男に殴られたり酷い目に遭わされると喜びますね」などと言って、それに対し宮尾登美子さんが「本当にみんなそうです。だから最近の若い男性は弱くて絶望します」なんて答えている。そういう歴史を見ると、少しずつではあるけれど女性たちは変わってきていると思う反面、男尊女子成分は急にはなくならないことも痛感しました。

そうした中で、別の仕事で『an・an』という雑誌の歴史を紐解いている時に、自分自身に直接結びつく男尊女子の源流みたいなものを発見したことがありました。それは1970年代の前半に「ニュートラ」というファッションが神戸で発生したということでした。ニュートラというのは「ニュー」な「トラディショナル」という意味です。その前にアイビーというトラディショナルファッションが流

行っていて、基本はトラディショナルだけれど、アイビーよりもっと女性的で華やかなテイストのファッションがニュートラでした。このニュートラこそが『JJ』とか『CanCam』にその後つながっていく、いわゆるモテファッションの源流です。

『an・an』は1970年に創刊された、日本で最初の若い女性向けのファッショングラフィック雑誌でした。最初の頃はウーマン・リブとかヒッピームーブメントの影響も受けて、自由で開放的なファッションやセックスの問題も扱う雑誌だったので、その『an・an』がモテファッションの源流となったニュートラを初めて紹介したことが、私はとても意外でした。けれど、創刊以来『an・an』で打ち出していた開放的なファッションとニュートラはやはり折り合いが悪くて、結局「あなたはニュートラに賛成？ 反対？」といった大特集が組まれるに至ります。ニュートラ賛成派は、「新しい服装の人って、服装も生き方もだらしがない感じがするの」とか、「ニュートラを着てる人は、おしゃれも生き方も清潔なはじめがあるんです」とか、「ウーマン・リブなんて絶対に嫌」とか言っているのに対して、ニュートラ反対派は、「親とか世間体ばかり気にするニュートラの子は許せない」とか、「新しいファッションは自由で独創的でなければならぬのに、そういう理想を持っていないニュートラは断固否定すべき」といった意見を持っていました。ファッションの違いというよりは、保守と革新という、生き方や思想の対立になっていたわけです。

『an・an』はニュートラに対抗するファッションの概念として「リセ」というものを打ち出しています。パリの女子高生であるリセエンヌのようなファッションということなのですが、『an・an』はこの2つのファッションの違いを、ニュートラが男性に対して「私は女性です」と叫びながら歩いているファッションだとしたら、リセは「男女平等」と呼びかけながら歩いている服だ、というふうに書いています。結局『an・an』はニュートラと決別して、男女平等の方の道を選びました。その結果として、他社で『JJ』というニュートラのため

の雑誌が創刊されるのですが、この分岐が日本における「モテ至上主義者」と「非モテ派」の分断の、第1歩ではなかったかと私は思っています。その後、ニュートラという球根は『JJ』や『CanCam』などの雑誌で順調に育まれていって、モテ思想の花が開きました。『an・an』の中でできた「リセ」対「ニュートラ」の図式は、後の働く女と専業主婦の分断とか、会社の中で言ったら女性の総合職と一般職の分断であるとか、そういった流れにもつながっていくことになります。

ニュートラがなぜ登場したかということ、そこには多分2つの理由があって、1つはヒッピーとかウーマン・リブといった70年代初頭に盛んだった自由と解放を求める動きに対する揺り戻し現象として保守系ファッションが台頭したというもの。もう1つは、この頃の女性は、モテなくてはいけないという切迫感を覚えざるを得なかった。1960年代の半ばに、日本ではお見合い結婚と恋愛結婚の割合が逆転して、急に恋愛結婚が多くなったことと関係しています。つまり当時は自分で結婚相手を見つけないとまらない時代の始まりだったわけで、そこからモテなくてはならないという強迫観念が高まっていったのではないかと。そんな中でニュートラというファッションは、保守系の男性にモテるポイントを正確に心得ていて、ジーンズやタイツは決して履かずにスカートと肌色ストッキングを貫くというスタイル。男女平等を男性に訴えて少しずつ距離を縮めるのではなく、ファッションで「私はあなたの敵ではない」とストレートに伝えることによって一気に距離を縮めていく手法であり、女性がすぐにいい気持ちになれる劇薬みたいな効果を持っていたと思います。

最近ではモテるとかモテないとかということがどうでもよくて、恋愛にがっつかない若い方が増えていると言われていますが、でも、実は今も男性とつがいになるために、そしてできたつがいを壊さないように、自分の意見や要求をそのまま口に出せない女性は多いのではないかと私は思っています。例えば相手に嫌われるのではないかと

と、セックスにノーと言えないとか、避妊をしてほしいと言えないという人は、若い人の中にもすごくたくさんいる。何で女性が自分の気持ちをそのまま男性に伝えられないのか、何で男尊女子が減らないのかという問題について、歴史をさかのぼることによって、その根っこが見つかるのではないかと私は思っています。

そろそろ時間が来たので、私からの話はこの辺にしたいと思います。ありがとうございました。

境：どうもありがとうございます。それでは3人目、田中美津さんをご紹介します。田中さんは1943年のお生まれです。1970年代ウーマン・リブの中心的存在であり、日常生活の中で生まれる、女である自分にとっての切実な問題を出発点に活動を続けてきた先駆者で、鍼灸師でもあります。著書『いのちの女たちへ——とり乱しウーマン・リブ論』（田畑書店、1972）は1972年の初版から半世紀、いまだに増版されている大ベストセラーです。昨年田中さんにフォーカスしたドキュメンタリー映画『この星は、私の星じゃない』（吉峯美和監督、2019）が公開されています。では、田中さん、よろしく願いいたします。

田中美津：ちゃんと映っています？

境：はい。映っていますし聞こえています。

田中：分かりました。初めましての人もいると思います、田中美津です。今日は何かお祝いの催しなんですよ。立教大も長年頑張っているそうで、それからWANは本当に、上野さんを始めとする方々の頑張りで、もうWANがないフェミニズムは考えられないようなそれだけの実力を培ったの11年間ですからね。最初はたった15分間しゃべるだけでいいそうですが、やっぱりまず私的にはお祝いの言葉に代えて、歌を歌わせていただくかな、と。

♪急いで急いで走って汽車ポッポ～。バンババ

バン、バンバババン。25歳はお肌の曲がり角よ～。バンバババン、バンバババン。女らしさを武器にして、うまく男をパクリましようね～。離さないわよパクった男、バージン餌にパクった男。ほかの女を蹴散らして、やっとなつかんだ妻の座だもん。急いで急いで走って汽車ポッポ～。バンバババン、バンバババン。花の命は短いものよ～。バンバババン、バンバババン。女らしさを武器にして、うまく男をパクリましようね～。うまく男をパクリましようね～♪

お祝いの歌としては随分と突拍子もない歌なんじゃないかと、きつと真面目な方は思われたと思うんですけど、この歌は今から50年ぐらい前、リブの運動をやっていた時に、私たちは思っていることを伝えるのに、楽しく、そしてよく伝わるようなやり方でやりたいと思ったもんですから、『ミュージカル「女の解放」』(1974) というものを作り演じました。これ、その中での歌なんです。この歌からも推察できるように、それまでの女性解放運動の真面目さに繋がることができなかつた人たちがリブに集まって、そしてリブを支えたと言ってもいいと思います。

何故それまでの運動が私たちに伝わって来なかったかということ、いま思えば人の生きる幅よりも運動が狭くなってしまっていたからではないかと思えます。私はかけがえのない存在であるとともに、かけがえがないから、嫌な男から絶対にお尻なんか触られたくない。リブはいわば50年前の#Me Too運動でした。10人ぐらいが集まって話し合うという、そんな小さなグループが日本のあちこちにできて、「私が解放されるためにどんなことが必要なのか」とか、他人の話から刺激を受けたりしてリブ運動を形づくっていきました。何か偉い学者さんがいて、その人の書いたものを通じて出来上がった運動ではないですから、みんな自分のぐるりの問題から、何が行き難くしているのかということ自分の言葉で明らかにしながら、私たちは少しづつ進んでいったのです。

ですから、「嫌な男からお尻なんか触られた

くない」「そうよ、そうよ」と言いながら、「でも好きな男が触りたいと思うお尻は欲しいわ」という話になっていく。「触られたくない」はみんなに共通したことだから運動の大義となって、それプラス「セクシーなお尻が欲しい」の個の欲望も大事。大義と欲望の2つを握って世間が運動と思ってくれるものを作っていました。「触られたくないし、触られたい」という主張ですから、スッキリとはいかない。さつき紹介していただいた私の本が「とり乱しウーマン・リブ論」という副題になっているのも、そんなところから来ています。

とにかく自分以上にもなりたくない、自分以外にもなりたくない。でも自分って何なの？ 私たちは、そこから考えていかなきゃならなかつた。他人に「こういう私なんです」と言っただけにわかってもらえるようなことは、容易く言葉化できる。でも「好きな男が触りたいと思うお尻が欲しいわ」なんてことは、実際にそう思って生きているにもかかわらず、それは日常、言葉化されることがないから、そういう欲望を口にすることで「社会が求める自分」でない、「自分が求める自分」を女たちは手に入れようとしたのです。そういう意味でも私たちは、一体どんな解放を求めて頑張ろうとしているのかということ、女性解放の本からではなく、自分たちで話し合いつつ深めていきました。いろいろな女性解放の本が出ている。でも私たちの疑問に答えてくれる本だとは思わなかつた。正しいだけでは、私たち個人のいろいろな日々の戸惑いとか孤独とか、そういうものにながっていかない。私たちは大したことない者たちだけれど、でもその大したことない者たちの中にも社会への怒りとか、もつと自分らしく生きたいとか、自分以上のものにも以外のものにもなりたくないとか、そういった怒りや欲望があつて、それにつながる運動が私たちが欲しかつた。

昔の女の人たちの在り方を見ると、「靖国の母、何とかの妻」というかたちで女は妻として母として、こういうふう生きよと言われるだけけれども、女としての部分はまるでないかのよう。妻として、母としてだけで、あとはおばあちゃんに

なっていく生き方しかないような、たくさん子どもを産めば妻として、母として評価されるけれど、それ以外は否定されるような生き方を戦前の女たちがしてきたのに対し、戦後は妻となったら、2人ぐらい子どもを産んで母となって、そしてパートタイムで自分のお金を稼いで、自分の女としての部分も何とか生かさうと頑張ってきたのですが…。

日本はヨーロッパに比べるとうんと早く、昭和23年から中絶が許されたので、子どもを持たないで仕事を選んでいく道もあったんだけど、しかし昔の女が「靖国の母、何とかの妻」という国が求める女を生きるしかなかったのと同じように、一見私たちは戦後、男女平等が叫ばれるようになって随分マシになったがしかし、一步深く考えると、結局、戦後の復興というのは、女が中絶しながら支えてきたわけです。男は長時間労働で家のことは何もできないから、そういうことは女が全部背負って…。けれども男のお金だけでは食べるのが難しいから、安いお金でパートにも出る。でもそれで子どもが産めなくなるようでは困るから、2人ぐらいは産んで、あとは中絶。というように中絶が許されてきたのです。

その意味では、戦後も、国や大企業にとって都合のいい女として男として存在させられているという構造自体は全然変わっていない。これ、あんまり大きい問題だから考えないようにしてきたところが従来の女性運動にはあったのではないかな。私たち自身、女性解放と言われても「そんな大層な問題よう知らんわ」「自分とは関係ないわ」と深く考えようとはしなかったのだから。そのことを自覚することで、モヤモヤしながら同じように思ってる女たちへ、自分たちは言葉を届けることができるんじゃないかと思いました。それで女の生き方がどんなにか不条理、理不尽、頭に来るかということ、全編喜劇のミュージカルとして表現。それから、見えるかな、これは私たちの『リブニュース』(画面に紙面を見せる)。なんだかおもしろそうでしょ。こんなイラストいっぱい楽しい女性解放の情報誌を作っているところなんて、

残念ながら今だつてないんじゃないのかしらね。

戦前も戦後も、私たちは労働力として生かされたり、母として生かされたりしているけれども、女としては生かされていない。女として生きるというのはどういうことなのか。私たちはやさしさと、やさしさの肉体的な表現としてのセックスを併せ持つ存在なんだ、ここに立つて生きていきたいんだということを強く訴えて、とにかくそれまで何となく運動の中でもタブー視されてきた性と生殖の問題に果敢に切り込んだのは、リブの特質として論じられてもいいんじゃないかと思います。

そういうことをミュージカルとか、今お見せした『リブニュース』とか、それから10人ぐらい集まっては今の#Me Too運動のようなことをしながら、運動を形づくっていったのには訳があります。世の中に訴え広めていくという運動の生産性も大事。でももつと大事なのは、解放されるべきは私自身だということ。そこるところとちゃんと真向かわないで、もつぱらほかの人たちに呼びかけるというようなことは絶対やりたくない。つまり、私の生きることが楽になることと、運動が大きくなることはイコールでありたいと思ってました。そんなふうにしたのは、やはりリブに関わっている人たちが、それまでは全然女性解放というものに関りを持たなかった、持てなかった人たちだったからで、苦しむ自分、悩んでいる自分を軸にした運動にしたいというこだわりがあったからです。そういう意味では、今でも会社勤めやご近所との関係を通じて、「変だわ。何でそんなこと言われなきゃならないの、思われなきゃならないの」ということはたくさんあるはずで、そうした思いに対して、フラワーデモとか#Me Tooの運動は、「私から私たちへ」の回路をなしていくために凄く大切なことですよ。

ただ、国際婦人年と軌を一にして、いわば日本政府も半ばフェミニズムの運動を是認するというか、国際的にも女の人たちが解放されることによつて、国ももつと良くなるんだという潮流になってきて、フェミニズムも一層公認されてきた

ように思うんですけど、どうなんでしょうか。これは私の全くの誤解かもしれないけど、今回集まっているほとんどの方が学者や学生の方みたいですから、そういう方たちにお聞きしたいんですけど、フェミニズムの運動は、私たち部外者から見ると、何か大学の先生が正しいことを言っている、でも面白くない運動にまたまたなってる…という気がしないでもないのよね。後から上野さんにボカボカにやられることを覚悟して、正直な気持ちを言ってみました。

大体もういいんじゃないの、15分しゃべったよね。どう？

境：はい。ありがとうございます。お祝いということで素敵な歌声を聴かせていただきまして、どうもありがとうございます。

田中：だって私、リブだもん。

境：生で聴けてとてもよかったです。ではこれから5分間の休憩時間を挟みまして、18時40分より第2部を再開いたします。

<休憩>

境：お待たせいたしました。これより第2部パネルディスカッションを開始いたします。第2部では、基調報告をいただきましたお三方のパネリストに加え、コーディネーターに佐藤文香さんをお迎えし、フェミニズムのこれからについてディスカッションしていただきます。

佐藤文香さんは一橋大学大学院社会学研究科教授で、ご専門はジェンダー研究です。人文書院より、共編によるインタビュー集『ジェンダー研究を継承する』(人文書院、2017)を出され、20～30代の後続世代によるジェンダー研究のパイオニアたちの困難や研究への思いを、運動や政治との関係も絡めて問うことを通じ、次世代への継承作業をまとめていらっしゃると思います。ここからの進行は佐藤さんをお願いしたいと思います。佐藤さん、

どうぞよろしくお願いいたします。

佐藤文香：よろしくお願いいたします。第2部のパネルディスカッションのコーディネーターの佐藤文香です。

まず自己紹介をさせてください。今、総司会会の境さんからもお話しいただきましたけれども、私は2017年に『ジェンダー研究を継承する』という本を出しました。これは一橋大学の大学院生たちとのプロジェクトで、意図したところは世代をつなぐということでした。パイオニア世代の研究者たちのライフヒストリーを、若い院生たちと一緒に聞き取りをするという作業です。それから昨年、『ジェンダーについて大学生が真剣に考えてみた——あなたがあなたらしくいられるための29問』(明石書店、2019)を学部生たちと一緒に出しました。Q&A欄に「入門書としてどんなものがあるか紹介してください」と投稿がありましたけれども、ぜひこちらの本を手にとっていただけると嬉しく思います。それから今秋、フェミニスト国際政治学者のシンシア・エンローさんの翻訳を出すことになりました。『〈家父長制〉は無敵じゃない——日常から探るフェミニストの国際政治』(岩波書店、2020)という本です。

これら3冊を挙げた理由ですが、今日は「フェミニズムが変えたこと、変えられなかったこと、そしてこれから変えること」ということなので、私としてはやはりフェミニズムのバトンをつないでいくというイメージでいるんです。ここ数年は私自身も意識して、このバトンをつなぐ作業をしてきました。その仕事の一端としてご紹介した次第です。

このように思い至るようになりましたきっかけは、上野千鶴子さんが東京大学を退職される際に行ったスピーチです。「私は私の前を歩いた女たちから、その言葉と思想を受け取ってきました。でも、私ももう、それを皆さんにお渡しすべき時期が来た。バトンというのは受け取ってくれる人がいなければ、そこに落ちてしまいます」。この言葉は大変ずしんと重く響く言葉でありました。ま

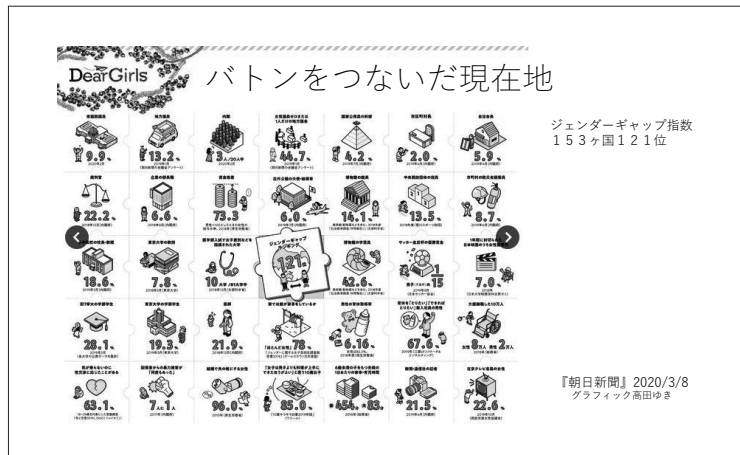


図1 2020年の国際女性デー「朝日新聞」のDear Girls
出典：『朝日新聞』2020年3月8日号 グラフィック：高田ゆき

た2017年に、雨宮処凛さんと出された本の後書きではこう仰っています。「すべての時代は過渡期で、すべての世代は道半ばで斃れるだろう。自分の前に連なるひとびとの群れと、自分の後に連なるひとびとの群れに気づく時、わたしたちには責任が生まれる」。私自身もこの責任の一端を微力ながら担わねばならない年になったのだという自覚の下に、先ほど述べたような仕事をやってきたということになります。

今日の登壇者の皆さんは、まさにこのような企画にとって最適なお三方でした。田中美津さんは『かけがえのない、大したことの無い私』（インパクト出版会、2015）という本の中で、年代論なんてあまり好きじゃないと言いつつ、世代関係なく、つながれる人とはつながれるんだと仰います。酒井順子さんは先ほどのスピーチでもご紹介がありましたように、『百年の女』で「婦人公論」を100年分読むという重厚なお仕事をなさいました。その後書きでは、若い女性たちにこの歴史をぜひ知ってもらいたい、「大正、昭和、そして平成の女性達と確かに自分もつながっているという事実を」感じて欲しいとお書きになっています。そして今回の登壇者では一番若い小川たまかさんは、先ほどご紹介のありました『ほとんどないことにされている側から見た社会の話を。』とい

う単著の中で、もしかしたら #Me Too運動はハリウッドからやってきた、あるいは刑法の改正は突然起こったように見えるかもしれないけれど、「そこに至るまでに、たくさんの人が声を上げ、次の人へバトンを渡してきた」。私もその「無数の人生がつないできたものを、記憶しておきたい」と書かれています。ということで、お三方ともに、まさにこのシンポジウムに最適の登壇者だったと感じています。

ところで、そのようにしてつないだバトンは、今現在どのような地点にあるのでしょうか。今年の3月8日、この日は国際女性デーにあたりますが、朝日新聞に色刷りの見開きページが設けられました(図1)。とてもカラフルでかわいらしいイラストで、真ん中には121とあります。これはジェンダーギャップ指数の数値が153か国中121位だったことをあらわしています。皆さんも報道等で、このジェンダーギャップ指数についてはご存じだと思います。この指数は、政治・経済・健康・教育という4つの分野からはじき出されるもので、それが最新版で153か国中121位というわけです。

細かく見ていきますと健康の分野は40位です。もしかしたら皆さんにとって意外かもしれませんが、日本では女性の方が平均寿命は長いのです

分野	項目	日本
経済参画 115位	労働力率の男女比	79位
	同種業務での給与格差	67位
	勤労所得の男女比	108位
	幹部・管理職での男女比	131位
	専門職・技術職の男女比	110位
教育 91位	識字率の格差	1位
	基礎教育在学率の格差	1位
	中等教育在学率の格差	128位
	高等教育在学率の格差	108位
健康 40位	出生時の男女比	1位
	健康寿命の男女比	59位
政治参画 144位	国会議員の男女比	135位
	閣僚の男女比	139位
	過去50年間の国家代表の在任年数の男女比	73位

図2 ジェンダーギャップ指数の分野および項目別順位

が、ここで測られているのは健康寿命です。さらに出生時の男女の比率で数値を出していますので40位となっています。それから教育も91位。おかしいと思われるかもしれませんが、先進国のほとんどでは今や男女格差はありません。ですので、ちょっとでも高等教育に格差が出てしまうと、このようにランキングがガタッと下がってしまいます。しかしこの2つに比べてみれば、経済や政治が際立って悪いことを見て取れると思います。経済115位、政治が144位です(図2)。

この指標はそれぞれ細かく14項目に分かれておりまして、その順位は表に書かれているとおりです。勿論こうしたランキング自体に問題がないわけではありません。ここで測られているのは、あくまでも男女の間の差です。例えば、発展途上で識字率が男性も女性もどつこいどつこいだったといったような場合は、高等教育の部分で差が出た先進国よりも、順位が高く出てしまうこともあり得ます。ですから、このジェンダーギャップ指数をあまり過度に重視すべきではないと言う方もいらっしゃると思います。あるいは、こうしたランキングが不可避に持つしまうナショナリスティックな要素。国によって女性の地位を比べると、保守的な人の中には、「自分たちの国の女の地位が

こんなに低いのはみつともない」とナショナリズムを煽られて何とかせねばと思う人もいるかもしれませんが、そう思ってもらうこと自体はいいことかもしれませんが、そうした副作用みたいなものもある。あるいは小手先でランキングを上げようと思えば、この数値の改善に取り組めばいいので、実はそうしたやり方で順位を上げることに力を注いでいる国はたくさんあります。ここから漏れている指標はどうなのかとか、他にもいろんな問題を抱えています。ただ、そうはいつても統一的な指標で世界を見渡すという意味で、私はいまだこの指標は有効ではないかと思っています。

先ほど紹介した朝日新聞に出たかわいらしいマップには、いろんな興味深い数字が出ているので、少し見ておきたいと思います。例えば裁判官の女性比率は22.2%です。お医者さんは21.9%。小川さんからお話のあつた記者は21.5%、テレビ局は22.6%となっています。企業における部長職は6.6%。そして賃金を男性100とした場合の女性の賃金は73.3%。

教育の分野で言うと、小・中・高校の校長・教頭先生は18.6%、東大教授は7.8%しか女性がいまません。2018年には医学部の不正入試の問題が話題になりましたけれども、そこで女子差別が指摘

された大学は81大学中10大学。また旧帝大、東大・京大・阪大などの学部の女子学生の割合は3割を切って28.1%です。東大だけ取り出してみると19.3%。これは上野さんが入学式のスピーチで「2割の壁」と仰ったものですね。

政治の分野はどうかと言いますと、衆議院議員が9.9%、地方議員13.2%、内閣は20人中3人でしたが、菅内閣が新しく誕生して2人になってしまいましたので、さらにランキングが落ちるかもしれません。それから国家公務員の幹部も4.2%となっています。皆さんも覚えていらっしゃるかもしれませんが、日本政府はかつて、2020年までに各分野で意思決定層に占める女性割合を30%に引き上げる、「202030」というスローガンを掲げました。しかし今年は2020年ですね。とてもじゃないが達成できないということで、実は今「2020年代の可能な限り早期に30%を達成する」という後退した目標値に変えようとしているようで、これには注意が必要かと思えます。

それからジェンダーギャップ指数には出てこない、面白い数字も挙がっています。家では誰が家事をしているか。ほとんど女性という家庭が78%。6歳未満の子どもを持つ夫婦の1日当たりの家事・育児時間。妻454分、夫83分。5倍以上の開きがあります。そしてこれは問題だと思んですが、10歳の女の子たちの中で、女子は男子より料理が上手にできたほうが良いと思っている子たちが85%。こうしたジェンダー観が再生産されているという点で気が滅入るような数値かと思えます。男性の育休取得率6.16%。これも政府はかつて2020年までに13%にしようと言っていたのですが無理でした。新たな目標として、2025年までに30%と言っているのですが、さてどうでしょうか。それから、育休を取りたい男性が67.6%。かつてだったらもつとずつと低かったと思います。介護離職した10万人のうち、女性8万、男性2万。これも議論が分かれるところかもしれませんが、男性でも介護離職を迫られていることが見て取れます。さらに、気が乗らないのに性交渉に応じたことがあるという比率が63.1%。配偶者からの暴

力被害が何度もあったという人が、女性の7人に1人。そしてなかなか実現しない夫婦別姓ですけれども、日本には夫婦同氏の原則があります。どちらでも理論的には選んでよいことになっているのですが、結婚で夫の姓にする女性が96%という状態です。

さて、ここまで確認した上で、本日のご登壇者たちの世代を見てみたいと思います。美津さんは、年代論は嫌いと言ったのに申し訳ないんですけども、1943年のお生まれですので全共闘世代に当たります。酒井順子さんは66年のお生まれですので、ご本人も仰っていたようにバブル世代です。小川たまかさんは80年のお生まれですので、ポスト団塊ジュニア世代です。そして本日のシンポジウムの立役者、上野千鶴子さんは1948年のお生まれですので団塊の世代。みんなの年齢ばかり暴露していますので、私も巻き添えを食ってカミングアウトすると、私は72年生まれですので団塊ジュニア。ということで、見事に上手な感じでばらけています。

次に見てみたいのが視聴者の皆さんの年代です。今、画面の向こうに600人を超えた人たちがいらっしゃいますが、主催者の方に内訳をいただきましたところ、一番多いボリュームゾーンが20代だそうです。このテーマでこれだけの方に興味を持っていただいたことは、とても嬉しく思っていますし、全体に満遍なく参加していらっしゃることに、とても勇気の出る思いでいます。

登壇者のお三方は、一体どのような時代を生きてきたのでしょうか。私は社会学者ですが、社会学で重んじていることに「社会学的想像力」があります。これが何を意味するのかは諸説あるんですけども、一つ重要なことは、個人的な問題とものを社会のマクロな問題と相互に関連付けながら考察する力というような意味です。それからもう一つ、社会学的想像力と捉えたいパースペクティブとして、異なる立場に置かれている人の視点に立つてものを考えてみる、そういう力。最近ちょっと気になっている動向として、私たちは時代を経るごとに賢くなっていっていき、つい現在の地

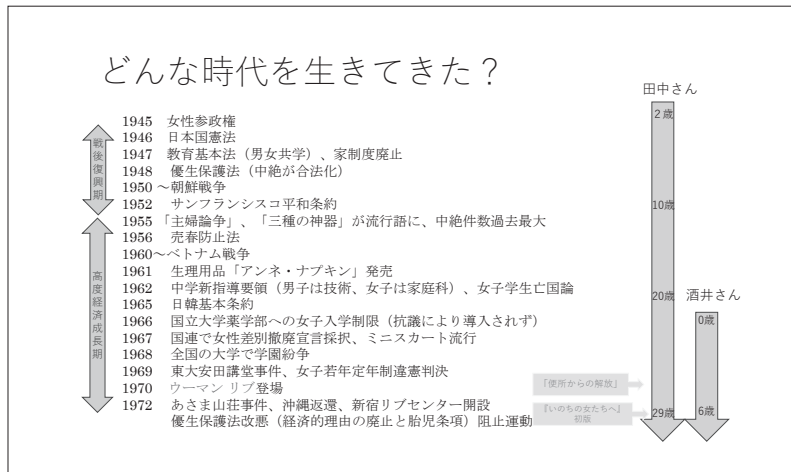


図3 主な出来事と三人のパネリストの略歴①

参考：比較ジェンダー史研究会ホームページ「日本史④現代日本と世界（1945以降）」(https://ch-gender.jp/wp/?page_id=12203 2021年1月20日確認)、上野千鶴子/田房永子「上野先生、フェミニズムについてゼロから教えてください！」(大和書房、2020)

点から過去を断罪してしまう、過去はなんと単純なものを見方をしていたらと批判を鋭く向ける傾向があります。ここで言いたいのは過去を批判してはいけないということではなく、そのような批判すべき物言いや主張が過去にあったとして、一体それがどういうコンテキストの中で生まれたんだろうかということを考える、それが社会的想像力ではなかろうかということです。ということで、少しお付き合いください。

先ほど申し上げたとおり田中さんは43年のお生まれでしたから、2歳の時に女性参政権が実現しています(図3)。その翌年に日本国憲法ができて男女平等が原則となる。そのさらに翌年、教育基本法で男女の共学がスタートします。そして48年には優生保護法ができて中絶が合法化されます。1950年からは朝鮮戦争が始まり、52年にはサンフランシスコ平和条約で日本の主権が回復される。しかし沖縄ではアメリカの統治が続きます。それから1956年には売春防止法が制定され、60年からはベトナム戦争が始まります。62年には中学校の新指導要領で男子は技術、女子は家庭科という分業型の教育がなされます。ちょうどこの頃、文学部に女性が増えていくんですが、「女子学

生亡国論」といって、男性の教授たちが、「花嫁修業のようなことで女子学生が増えていくのは由々しきことだ。国が亡びる」というような主張をする。このような時期に田中さんは20代に入っていきます。

65年には日韓基本条約、67年にはミニスカートの流行も起こっています。68年、全国の大学で学園紛争が起こり、69年に女子若年定年制違憲判決。若い皆さんにとっては驚きかもしれませんが、当時の会社は大体、女性は結婚するか、30歳になったらやめてもらうという念書を交わして入社させたんです。それに初めて、おかしいだろうと物申した女性が裁判を起こし、違憲判決が出たのがこの年だったということになります。そして、われらが田中美津さんがウーマン・リブを始めるのが1970年。有名な「便所からの解放」という文章はこの時に書かれます。

72年には沖縄返還が行われ、また優生保護法改悪という動きがありました。先ほど中絶が合法化されたと申しあげましたけれども、この中の経済的理由をもとにした中絶を保守派が削除しようとして、代わりに障害を持って生まれる子どもたちを産ませないように胎児条項を入れようとした。

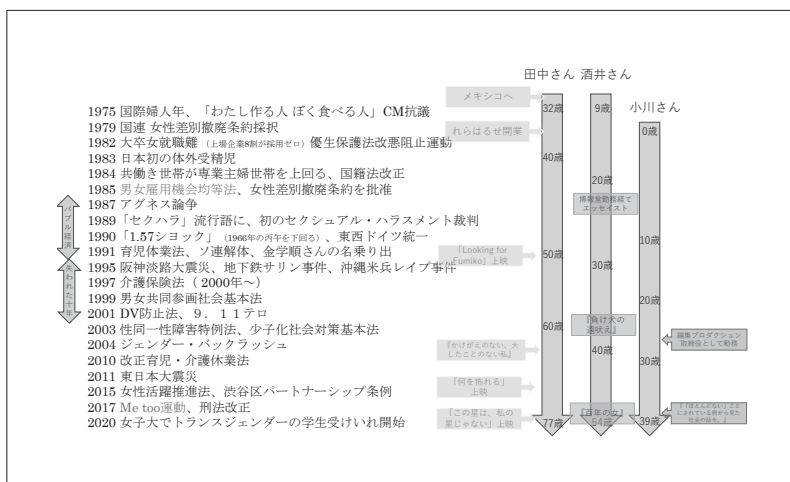


図4 主な出来事と三人のパネリストの略歴②

参考：同上

これに対し、女性と障害を持った当事者たちが時には対立しながら、阻止運動を続けていきました。この時、『いのちの女たちへ』という有名なテキストが田中さんから生み出されます。29歳でした。酒井さんはこの当時6歳ですので、小学校入学前ぐらいですね。

1975年は先ほど田中さんからもお話がありました国際婦人年です(図4)。それから「私作る人、僕食べる人」。年配の方々のご記憶にあるでしょう。ハウス食品のCMで、性別役割分業を助長すると抗議が行われ、放映中止に追い込まれました。この時ちょうど、田中さんはメキシコへ渡っていくことになります。79年には女性差別撤廃条約が国連で採択されます。それから1984年に共働き世帯が専業主婦世帯を上回るという現象が起きました(図5)。小川さんはご著書の中で、ご自身が共働き世帯で生まれたとお書きになっていますし、先ほどのお話の中にもありましたが、ちょうどこの時にお生まれになったということです。そして1985年、男女雇用機会均等法ができます。これは酒井さんに関わる現象で、酒井さんはまさにこの均等法第1世代として博報堂に勤務されることになります。

それから89年にはセクハラが流行語になりました。先ほどもスピーチに入っていたと思います。そして初のセクシュアルハラスメントの裁判が起こったのが89年でした。それまでは、職場の潤滑油だと言われていたようなボディタッチ、あるいは卑猥な言葉を掛けるとか、もっとひどいと性暴力の被害に遭うとか、それを泣き寝入りしなくなったきっかけになる裁判が、この時期だった。それから90年には「1.57ショック」。先ほど酒井さんのお話の中で丙午年生まれの方は出生率が低かったとありましたけれども、それをさらに下回ったことで、1.57ショックと呼ばれました。そして冷戦が崩壊します。

韓国では、元慰安婦だったさんの名乗り出が91年に起こっています。95年には沖縄で、米兵による少女の集団レイプという悲しい事件も起きてしまいました。それから99年、男女共同参画社会基本法ができます。ここで初めて日本は、男女は性別にとらわれず各自の個性や能力を発揮することができる社会を目指していくんだということ、国是として設定することになったわけです。2001年にはDV防止法ができます。そして2003年、性同一性障害特例法が議員立法として成立し、ここ

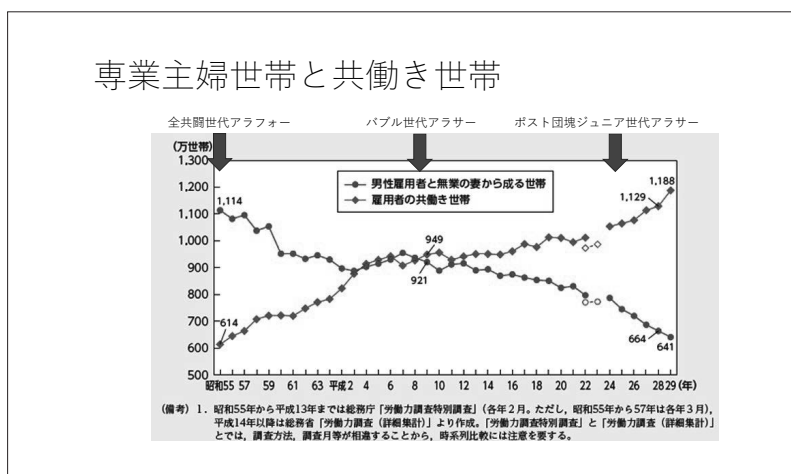


図5 専業主婦世帯数と共働き世帯数の変化

出典：内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書」2018年度版

で初めて戸籍の性別変更が、一定の条件を満たせば可能になりました。しかし2004年には、99年に成立した基本法に対して、よろしくない、日本の伝統を壊してしまう、フェミニストの陰謀によって国がおかしくなっていると「ジェンダー・バックラッシュ」と呼ばれる現象が起こっていくことになりました。

それから2011年には東日本大震災が起こり、2015年、安倍政権下で女性活躍推進法が作られます。また渋谷区で初めて、同性間のパートナーシップを公的に認める条例が作られました。さらに2007年、小川たまかさんに関係の深い#MeToo運動が起こります。刑法が110年ぶりに改正されたのも、この時期でありました。そして2020年、女子大でトランスジェンダーの学生の受け入れが開始されました。ざっと確認するとこのような感じになります。

今回はお三方が18歳だった時に、進学率はどうだったのかを見ておきます。美津さんの時には、6割の方が男女共に高校に進んでいました。しかし大学は男性でも15%、女性に至っては3%という非常に少ない人しか大学に行かなかつたことが分かります。これが酒井さんの世代になりますと、9割の方が高校に進学し、大学も男性は3割、女性は

1割を超えます。さらに小川さんの時代になると、高校はほぼ100%、そして大学も男子は45%、女子は28%、3人に1人は大学に行くようになったわけです。

ライフコースを見ても、全共闘世代の美津さんの時代は25歳で結婚し、27歳で第1子を産むのが標準的でした。これが酒井さんの世代になると2歳ずつ年齢が上がります。さらに小川さんの時代になると2歳アップします。いずれも晩婚化、晩産化が進んでいったということが見て取れると思います。

また、みんなが結婚するというだけでもなくなっています。離婚率を見てみますと、美津さんの時には、30代後半で結婚していない男性はたった4%でした。これが酒井さんの世代になると、30代後半で4人に1人は結婚していない男性がいる。さらに小川さんの時代になると、30代後半の男性の3人に1人は結婚していない。女性で見ると、美津さんの時代には30代後半の女性で結婚していない人はたった7%。これが1割になったのが酒井さんの時代、2割を超えたのが小川さんの時代です。

専業主婦世帯と共働き世帯のパワーバランスも変わっていきます。全共闘世代の時は、やっぱり

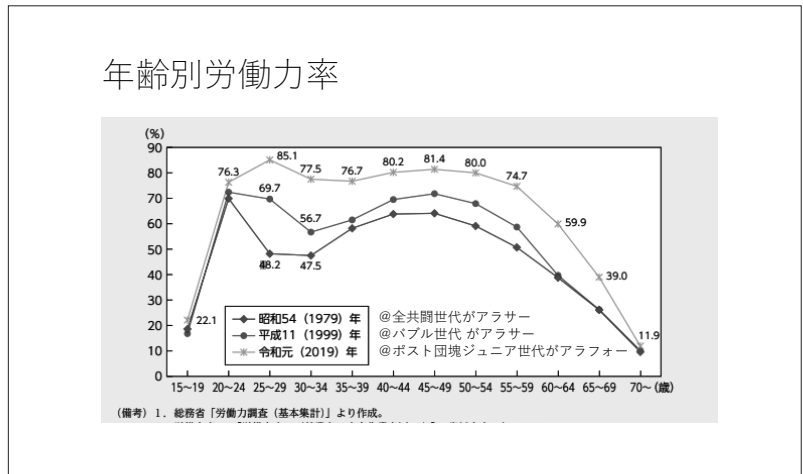


図6 女性の年齢別労働力率の変化
 出典：内閣府男女共同参画局『男女共同参画白書』2020年度版

何と云っても、サラリーマンの夫とそれを支える専業主婦の妻という世帯が圧倒的でした。これがバブル世代になると拮抗し始め、完全に決着がついて、共稼ぎの世帯の方が増えていくのが、小川さんのポスト団塊ジュニア世代ということになります。

さらに「M字型就労率」。お聞きになったことのある方も多いでしょうが、女性は出産や結婚によって労働市場から撤退することで、年齢別に労働力率を見てみるとグラフに谷底ができます (図6)。美津さんの時にはくっきりとM字を描いているこのグラフが、酒井さんの時代になるとM字の底が少し上がる。そして小川さんの時代になると、もう完全に谷底ではなくって台形に近いカーブになっています。

しかしこれを手放しで喜ぶるかといったら、そういうわけでもありません。皆さんも非正規雇用の問題については、色々なところで耳にしていらっしゃると思います。最初にこの非正規労働の問題がクローズアップされたのは、何と云っても男性たちの間でのことでした。働き盛りの男性たちが正規雇用に就けていないということが、リーマンショック以降、問題化していったわけです。勿論、男性にとってだって由々しき事態であるの

ですけれども、女性が圧倒的に多く非正規の労働についていることが見て取れます。さらに、バブル世代とポスト団塊ジュニア世代を見ると、これが悪化し、非正規化に拍車がかかっていることが分かると思います。

最後に、私たちの暴力に対する感受性の変化について。左側に映っているのは、みんな大好き『サザエさん』ですね。これは1969年の一コマ、美津さんが20代だった頃のもので (『朝日新聞』1969年10月22日朝刊に掲載)。路上のバス停のところで男性が女性をバンとひっぱたいている。「何でおふくろに口答えした」と。波平さんを含めて「パンチ効いてましたな。なつかしき情景ですな」とみんな笑顔でいます。これは恐ろしい光景ですよ。授業で学生に見せるとドン引きします。やっぱり私たちの感性が大きく変わったということではないでしょうか。

また右側は小川さんのニュース記事から拾わせていただきました。1982年に作られた雑誌です。美津さんの世代がアラフォー、そして酒井さんの世代が10代の時の創刊号です。「快適通勤電車特集——ここまでなら捕まらないストレス療法」というとんでもない特集号なんですけれども、「美人を触るのがコツ」とか書いてあって、触る良

い例などがイラスト描きしてあつたりする。これもやっぱり今の感覚からすると本当に信じられないですね。このように私たちには、変わったこともあり、しかし変わらないこともありという、そういう状況をここまで確認してきました。お付き合いくださりありがとうございます。

最後にコーディネーターからお三方それぞれに、2つずつ質問を用意してみました。田中さんにお聞きしてみたいと思うことの1つは、リブの運動を通して一番これは変えられたと誇りに思っていることは何でしょうか、ということです。それから2つ目は、時にリブの担い手は中産階級の高学歴の都市部の女性であつて、本土に住む人々、そして異性愛者であり、シスジェンダー、つまりトランスジェンダーではない女性たちであつたと言われます。担い手がすごく一枚岩の存在だつたように語られることがあるかと思うんですが、本当のところは一体どうだつたのでしょうか。

Q&A欄にも関連した質問が1つあります。「田中さんの「私たち」という言葉には、「男に好かれたい私」という前提があるんじゃないか。その点がどうしても異性愛を前提にしているようで違和感を覚える」と書かれています。この2点目の質問に絡むと思いますので、この辺りのことをお伺いできればと思います。

酒井さんにとっては、何といつても均等法がご自身のライフコースの中で大きな出来事だつたと思います。当時の女子大学生にとってこの均等法の成立は、一体どのように受け止められていたのでしょうか。また、酒井さんは『負け犬の遠吠え』というご著書や、「男尊女卑」ならぬ「男尊女子」など、この社会を生きるのにあまり軋轢をもたらずに済むような、当事者の知恵といったようなものを懐疑しながらも温かく見守る、そういう姿勢をお持ちだつたと思います。そのような酒井さんにとって、フェミニズムの、社会を変えるという志向性は、生存戦略と一体どういう関係にあるものとお考えになりますか。

「負け犬」についてはQ&A欄にもご質問が来ています。「酒井さんが特定の女性、つまり30代、未

婚、子なしの女性のことを「負け犬」と定義したのはなぜだつたのでしょうか」。それから「男尊女子の系譜の根源には、一体何が あるとお考えでしょうか」という質問が来ていますので、併せてお答えいただけたら幸いです。ご報告では「ニュートラ」と「リセ」の話をしていただいて、「ニュートラ」を選んだ人たちの戦略、モテなきゃいけないという切迫感が、まさに時代のコンテクストの中で生まれたものだと仰られていたと思いますが、この男尊女子については、いかがお考えでしょうか。

それから小川さんにも2つお聞きしたいです。何と言ってもお三方の中では、一番ネット使いに長けていらつしやる世代だと思いますが、最近ではフェミニズムについて、SNSを通じて初めて知つたという方もいらつしやると聞いています。そのようにSNSが、フェミニズムをつなぐツールとしての有効性を持つ一方で、同時にオンラインミソジニー——ミソジニーというのは女性蔑視ですね——そういう空気も蔓延しているという両義的な状況がSNSにはあるかと思ひます。この現象をどのように捉えていらつしやるのでしょうか。2つ目は、リブが誕生して半世紀を経たわけですが、小川さんから見て、変えられなかつたまま残された課題は、一体何だとお感じになっているのでしょうか。

またQ&A欄からは、「ご自身のお仕事を立派に貫こうとされている小川さんの強いお気持ちは、一体何を糧にして生まれてきているのでしょうか」という質問が来ていますので、1点目に絡めてお話しいただけるとありがたいです。

どの順番でお話しいただくのがよろしいですか。我こそはと準備の整つた方から始めるのもよろしいですし、年功序列で美津さんから始めるのもいいですが、美津さんがいいかな、お願いします。

田中：えつ、何だつけ、最初の質問は。

佐藤：リブの運動を通して、これは私たちがやつ

たから変えたんだぞと一番誇りに思っているものは、美津さんにとっては何でしょう。

田中：そんな誇りとかいう言葉で語れるようなことだとも思えないんですけど、「田中は個人的にこんなふうに思うのよ」程度の話として聞いてください。自分のぐるり、自分の痛みから女性解放を考えることができるようになったことかな。今日もそういったところにフォーカスしてしゃべったつもりですけど、そのことが私にとってリブがもたらした一番いい点かと。リブになった人たちって、今まで女性解放に自分をつなげることができなかった人たちが大多数で、私たちは一緒に「リブ新宿センター」を作って、その傘下に6つぐらいのグループがいるんな活動をしていました。例えば性と生殖の問題から考えていこうとするグループもあれば、同性愛者としての問題意識からリブの問題を考えていこうとするグループや、あと子育ての問題から、「東京こむうぬ」という共同体育児のグループが生まれた。「こむうむ」で活動していた武田美由紀さんたちは、デモや集会も子どもの手をひいたり、ベビーカーを押して参加していました。誕生したばかりの運動だから、常にあおぎ続けていないと消えてしまいそうな気がして、もう正月の2日からビラ時きしたし365日毎日何かやることがあって、もちろん暮らしのお金も稼がなきゃならないしという大変な生活。「コレクティブ」と称して何人かで共同生活しながらの活動でしたが、そうしないと暮らしていけないから、1年ぐらいはやむなくそういうこともしました。

とにかく自分のぐるりの問題から、自分の痛みから始まる運動で、痛みを言葉にして、自分だけの痛みじゃないということを知ること、参加者は「個」であり「面」である自分を獲得していったのね。

佐藤：2点目はどうでしょうか。リブの運動は、一部の限られた女性たちの運動だったのではないですか、という。

田中：「一部の限られた」の「限られた」の内容は何？

佐藤：まず、中産階級で高学歴で本土出身の日本人であり、異性愛者で、トランスジェンダーではない、そういう女性たちの運動だったんじゃないか。

田中：さっきも話したように、必ずしも異性愛者の運動ではなく、レズビアンの人たちもリブを名乗って運動してたし、そういうグループも結構ありました。それから、あと何だっけ。

佐藤：中産階級、高学歴。

田中：私が高卒なのはご存知よね。既に働いている人と、大学生や大学卒は半々ぐらいの参加だったと思う。中産階級が多かったというのはそうでしょうね。食べる事より気持ちの問題の方が大きい女たちの運動だったから、あ、今のフェミニズム運動もそうでしょ。中産階級が層として現れ、結婚に疑問を持つたり、男との関係で疑問を持つ人たちがマスとして現れたことで、リブの呼びかけに共感したんだと思います。あと何でしたっけ。

佐藤：そのぐらいで大丈夫です。

田中：これも言うておきたい。とにかくマスコミが酷かった。マスコミの男たちは恐怖を覚えたのかもね。既得権を取り上げられるんじゃないか、男が隠していたいことが光に晒されてしまうんじゃないかという不安や恐怖。多分それがゆえの、とにかく酷いバッシングをリブは受けました。今までの運動の中で一番酷いバッシングを受けた運動じゃないかと言われています。

佐藤：私がすごく印象に残っているのは、美津さん、さっき中産階級についてはそのとおりだ、食べるに困っていたわけではない、と。確かにそう

かもしれないですけど、その一方で、美津さんたちはホステスの気持ちを知るために、ホステスになつたりもしているじゃないですか。そういうふうには、異なる立場にあえて身を投じることによって、自分の経験の幅を広げてみることもなさっていたわけですよね。

田中: そう。理屈の上で、妻とホステスは一つ穴の貉もじなだと言いながら、主婦の方は自分の母親も含めて、周りは主婦だらけだからなんとなく分かるんだけど、ホステスというのが観念でしかなくて。その場に身を置いたらどんなふうにするものなのか。頭だけで間違つた理解や把握をしたくないというのがあって、結構ホステスをやってみた人たちはいたみたいです。長くは続かなかつたと思いますけれど。私も2ヶ月位やってみました。

佐藤: ありがとうございます。それでは、小川さん、お願いできますか。

小川: はい。1つ目のSNSのオンラインミソジニーについて。私が仕事を始めた頃が2006年ぐらいで、これを見ている10代とか20代の方はあんまりご存じないのかもしれないんですけど、インターネットの初めの頃は、すごく男性のものという感じが強くて。勿論、匿名で書き込むんですが、匿名掲示板とかになると、そこは男性であることが前提で書き込みが行われていたり、女性が書き込もうとすると、女性であることを隠して書き込みをするというようなことが結構あって。男性の文化が基盤にあるから、途中でネットニュースとかで女性のニュース——私はそういうコンテンツを制作していたんですけど——が入ってきたりすると、「スイーツ(笑)」などと揶揄されました。当時「スイーツ」という流行語があって、女性が女性の話や美味しい甘いデザートの話をしていただけで、「スイーツ(笑)」と揶揄されて、そこから女性のことを「スイーツ(笑)」と呼んで、「スイーツが来た」みたいな感じで言われることがありました。

そのぐらい基本的にネットは男のものでしようみたいな、極端に言ってしまうとそういうところがありました。スマホの登場で誰でも手元でインターネット、ネットニュースを見るようになって、かなり変わったと思うんです。インスタを女性がやるのは当たり前だし、ミクシイとかTwitter、Facebookでどんどん変わっていったところはあると思うんですけど、そうしたら逆にフェミニズムが叩かれるようになった。2006年頃には「スイーツのことばかり話して社会問題には興味のない、時事問題とか政治、経済に何の興味もない女たち。馬鹿な、ファッションのことしか考えていない女たち」みたいなことを言われていたのに、いざその女性たちが政治とか経済について物を言うことが可視化されたら「クソフェミ」とか言われて。それが非常に私は、お前ら…などと言っちゃいけないですけど、「10年前に何言っていたか覚えていますか」と思います。

すごく雑なことを言ってしまうと、60年代、70年代には社会の中の女性たちがいないところに、女性たちが入って行こうとするとすごく排除されていたようなところがあり、その後、社会の中で女性たちも声を上げると「フェミ」と叩かれたような、そういうリアルな現場や紙文化で行われていたことが、今度はネットでまた同じようになり返されているように感じています。現在のSNSのオンラインミソジニーは、皆さんも多分ご存じの方が多と思うんですけども、私も初めに痴漢の問題を取り上げて、性暴力をなくしたいというそれだけの記事を書くだけで「クソフェミ」と言われて。私はあんまりお勉強をしていなかったもので、フェミニズムとかに全然素養がなくて、そこで初めて「クソフェミ」と言われて。でも性暴力が嫌だと言って「クソフェミ」と言われるなら、じゃあフェミニストの方がいいんじゃないかと思って、アンチの人たちが私をフェミニストにしたと思っているところがあるんです。

先ほど佐藤さんから、コンテキストという話がちらつと出たと思いますが、SNSの中でも使っている人が一番多いであろうTwitterは140文字なの

で、140文字でコンテキストまで含めるのは難しいところがあって、文脈を共通理解している人の中では、140文字でいろんなものを読み取ってシェアしていけるんですが、それを知らない人が、いきなりバーンと140文字だけ見せられたら、フェミニストが何言っているんだろうみたいなことが言われていくのも、しょうがないと言っちゃいけないんですけど、そういう不幸なところがあるなと思っています。

以前、韓国のフェミニストの方が出された雑誌の裏表紙の日本語訳のところに「フェミニストではない人はセクシストです」と書いてあったんです。私はそのとおりだと思っています。なぜならフェミニストは性差別をなくしていきたい人ということだから、「私はフェミニストじゃないですよ」と言う人たちは、それはもうセクシストだということを100%納得して、Twitterでその画像をアップして、「本当そのとおり」とつぶやいたら、それをフォロワー数の多い保守的なタイプの女性に見つかってしまって、「こんなことを言っている方が差別主義者だ、バカヤロー」みたいなことを言われて。その人のフォロワーの保守的な人たちから、散々クソリプを投げられたことがありました。確かにフェミニズムについて何も知らない人からしたら、「フェミニストじゃないということはセクシストです」みたいな決め付けをされたら、びっくりするのもかもしれないですけど、でも説明を聞いてもらえたらそんな戦わなくてもいいのに、本当に藁人形みたいな怖いフェミニスト像を作って、叩いている人たちがいるなと思います。

でも一方で思うのは、ミソジニーが可視化されるのはいいんじゃないかなという。今まで一部でフェミニストが水面下で散々叩かれていた、酷いことをされていたのが、人の目に見えるところに出てきたという意味は、取って付けたような話かもしれないですけど、そこはメリットがあったんじゃないかなと思っています。

次の「変えられないまま残された課題」について。これは多分皆さん、そうだと思ってくださる

と思うんですけども、意思決定権の場に女性が全くいない。全くじゃない、3割ぐらいいいるかもしれないですけど、場所によっては1割とかしかいない。週刊誌『SPA!』が「ヤレル女子大生ランキング」を発表した時に抗議した、「Voice Up Japan」という大学生の女性たちの団体があって、その代表の山本和奈さんがあるイベントで話していたのが、「20代前半の若者の意見を聞こうというイベントを大人たちが開くけど、そんな若者の意見を聞こうとか言われている場合じゃなくて、意思決定の場に私たちユースが行くんだ」と言っていて、あ、山本さんかつこいいと思って。それを聞いた時に私はもう——私は氷河期世代ですけど——氷河期世代を飛ばして行ってくださいと思って。もう氷河期世代とかボコボコにされて、みんな牙が抜かれてしまっているんですよ。みんな、現場でも頭数いないなとか思ったりして。女性にしても私たちの世代にしても、「ものを言える立場になるまでは順番待っていてね」みたいな、そういう躰をかなり受けてきて、私の中にもその躰がすごく残っていると思うんですけど。ただ待っているだけだと譲ってもらえるはずがないので、今回もまたおじいちゃん内閣みたいなことになっていて、日本の政治におじいさんしかいない。今の若い女性に、本当にすいませんけれど私たちの頭の上を飛び越えて行って欲しい、遠慮しなくていいのかななんて全く思わないで欲しいと思います。ちょっと凶々しいぐらいでも、全然まだ足りないぐらいだと思います。

終わりにもう1つだけ言うと、先ほど美津さんが、マスコミが酷かったという話をされていたと思うんですけど、変えられなかったこととしてあるのが、女性の中にもあるかもしれないんですけど、男性のミソジニーの陰湿さを、ミソジニストの人たちに、あまりにもいまだに発言の場を与えてしまっていると私は本当に思っています。マスコミの中にも、勿論ミソジニーな人はいるし、学者の中にも教育者の中にも作家の中にもミソジニーな人は本当にいて。そういう人たちの言葉をいまだにありがたく受け取って聞いているし、マ

スコミもそういう人たちの言葉を垂れ流そうとしている。その人たちから発言の場を奪ってこれなかったのは本当にこれからの課題で、もうどんどん奪って行って、退場していただきたいと思っています。以上です。

佐藤：小川さんありがとうございます。それでは3人目の酒井さん、いかがでしょうか。

酒井：最初は均等法についてですね。私は立教の観光学科というところを出ていて、今は観光学部になっていますけれども、鉄道が好きなので鉄道会社に入りたいと思っていました。ちょうど国鉄が民営化された直後でJRを受けたのですが、1次であっさり落ちまして。聞いたところによると、民営化されたとはいえJRとかはほぼ国の会社みたいな感じだったので、女子は東大の人が数人しか入っていません、という感じでした。多分一般的には、そうしたごく限られたエリートが総合職になるというかたちが多かったと思います。私がかたま総合職として就職したのは、その会社が卒業女子は全員総合職というシステムだったからで、絶対に総合職になりたいと思ってそうだったわけではありません。

さらに、雇用機会均等法の詳しい内容、こういう法律なんだということを、当時の少なくとも私の周りの大学生は、あまり知らなかった気もするんです。上の世代が努力して勝ち取ってくださったものですが、ホイと投げ与えられたような感覚を持っていました。だからこそ、あまり使い方をよく知らなかったのだと思います。

結果的に、少しずつ総合職女性は増えていきましたが、初期は会社の中でも、どういうふうに関職女性を扱っていかよく分かっていなかったところがありました。珍しい生き物として、腫れ物のように扱うケースもあれば、男の土俵にきたのだから、男と同じにできるでしょうと扱われるケースもあって。それで身体を壊したりやめていった人たちもいました。今も最初に入った会社に残って出世している人や、男性の論理で動いて

いる会社を変えていくことができた人は、それほど多くないんじゃないでしょうか。さつき小川さんは、氷河期世代が牙を抜かれてしまっていると仰っていましたが、さらに上の世代の我々は牙を持つ感覚もなく、男の人の世界について行くことで精一杯で、だんだん疲れていったのかなと思います。

次が負け犬のことですね。参加者の方の質問と併せてお答えします。まず何で『負け犬の遠吠え』というタイトルにしたのか、「負け犬」と定義したのかということです。書いている当時、私自身30代半ばで独身で、ふと気が付いたらそうになっていたんですけども、自分たちはすごく楽しく過ごしていても、こういう私たちは周りから見ると、いくら「楽しい」と言っても負け犬がキャンキャン吠えているようにしか聞こえないんじゃないかと。その感覚をそのまま書いたのが、あの本です。今では30代で独身は全く珍しいことではないので、それを負け犬呼ばわりしたのは本当に申し訳ないと思うんですが、当時の感覚ではそうだったということです。

ちょっとずれますが、その時に「結婚しているけれども子どもがいない私は負け犬なんじゃないか、負け犬じゃないんでしょうか」という質問がすごく多かった。子どもがいる／いないというのが、実は結婚している／していない以上に大きな問題なんだと感じたことは覚えています。

『負け犬の遠吠え』を書いた時の感覚が、独身女性が負け犬感を覚えなくてはならない世の中を変えていこうというものだったかというところではなくて、そんな世の中をうまく傷付かずに生きていくには、自分で自分のことを負け犬として認めて、お腹を出して見せたほうが、ラクなのではないかという、佐藤さんが「生存戦略」と仰いましたけれど、そういう感覚は持っていたかと思いません。あの本はいろいろ誤読をされたところが多くて、結婚しなくたっていいじゃないかという主張だというふうに捉えられた部分も多かったんですが、私としては、そういった主張をする気持ちはなくて、「本当に自分で負け犬だと思っています

よ」と示したかった。あの本を書くことによつて、結婚していようがしていまいが、どちらでもいいんじゃないかとか、家族の形態というのはいろいろなんじゃないかとか、自分の考え方が変わっていきつけになりました。負け犬についてはその辺ですけれども、あとは何でしたっけ。

佐藤：男尊女子の根源には一体何があるのでしょうか。

酒井：さつき、70年代にモテファッションというものが発生したとお話ししましたが、それも多分根っこの一つであり、木みたいに方々に根っこはつながっていると思うんです。本当にその元をただしていったら、儒教が日本に入ってきた時のことになるかもしれませんし、1つのことを変えたからといって、男尊女子感覚がなくなるものではないのでしょうか。何かが1つ良くなったからといって、その後は放っておいても改善された状況が続くかという、またそうではなくて、時代が変われば、今までフェミニストの方々が少しずつ築いてきた平等というものが、後ろに戻っていく可能性もある。そういった意味では、常に変えていく努力を続ける必要があるのだと思います。

佐藤：ありがとうございます。先ほどは長々とレクチャーをして申し訳なかったですけれども、未婚率のデータを紹介しましたね。酒井さんの時代には、30代後半で10%の女性しか未婚でなかった。前半でも20%だった。それが現在では25～35%になってきたということが、やはり「負け犬」という言葉に対する距離の取り方の違いの一つなのかなと思いました。

それから男尊女子の根源については、ジェンダー研究の中では「ジェンダー秩序」という概念があります。江原由美子さんという社会学者の説明によれば、「ジェンダー秩序」は男性を活動の主体にし、そして女性をそのサポートにすることから成りたっている。この「男尊女子」も、男性を活動の主体にし、女性はそのサポート役に回すよう

な、ジェンダー秩序の中で生み出された一つの現象なのかなと思いました。さて一巡しましたけれども、どうでしょう。

田中：佐藤さん、ちょつといい？

佐藤：はい。

田中：酒井さんの話を聴きながら、すごく刺激を受けたんですけれど…。

佐藤：ぜひ、ぜひ。

田中：負け犬は負け犬としてうまく生きていけばいい、という考え方もあつていいんじゃないかということ言われたような気がするんですけれど、最初に歌った『ミュージカル 女の解放』の歌、あの歌を聴いてくだされば分かるように、男とか社会が望むように生きていくのが一番利口なんじゃない？という、あれはそういう歌なんですよ。実際に男や社会が望むように生きていくのが楽なんじゃないかしらという気持ちが、私たちにもなかったわけじゃなかったから。

一方、私以外の何者にもなりたくないという気持ちもすごく強くある。だけれど、私以外と言った時の「私」がはつきりしないわけです。私以外の何者にもなりたくないだけけれど、私とは誰？というか、私とは何？というか。そのところで私たちは、時にはホステスをやってみたりしながら、自分を知りたくて女同士集まっては「私って何者なんだろう？」ということ話を話して…。画一化された女の生き方が、ガンとしてあつた時代ですから。そんなふうには自分を主張しないで、男から見た好ましい女を生きるのがいいんじゃないかしら、でもやっぱり私として生きたいわという、すごく揺れ動く「私」もあつて、それって当然で、その揺れ動きそのものが、何か運動のダイナミズムとして役に立ったような気がします。整然とした状態からはパワーは出てこない。陰に陽に揺れ動くところから出てくるのがパワーだから。

酒井：それを聞いてちょっと安心しました。学生運動の話を読んでいると、当時の女子学生は、学生運動の中でも布団を干したりとか、おにぎりを握ったりとか、そういう補助的な役割を進んで担っています。学生運動の闘士たちが結婚する時は、運動をやっていた女がいいと言ったと美津さんもお書きになっていましたが、そういう場面で女性たちは、自分自身に対してどういう感覚を持って活動に参加していたんでしょうか。

田中：男が好ましいタイプだったら、おにぎりを握るのは快感なんです。だけれど、結婚して大したことない男だと分ると、今度はおにぎりをぶつけたくなるんです。そういうことかしらね。私たちだって新しい自分を求めるっていても、それがどういう自分なのか、しっかりとわかっていたのは「経済的な自立を目指す」ということと、「母のように生きたくない」ということ位でしたから。

酒井：もう1つ美津さんに伺いたいんですが、純潔の問題とか貞操の問題とか、その前の時代は結婚までは処女を守らなくてはいけないという感覚が強かったわけですが、70年代でその手の感覚はかなり変化した気がするんです。その辺りに対しては、女性達自身が、変えたいという意識を持っていたのでしょうか。

田中：どの時代でも女たちは生き延びるための手立てはしっかりと握るんです。やりたいことをやりたい、つまり好きな男とベッドインしたいという気持ちはあるでしょう。だけれど、そういうことをしたら、自分は安い女になってしまうのかなどと考えていくと、結局、問題なのは「バージンらしさ」だということに気が付く。バージンかどうかじゃなくて、バージンらしさを装えるかどうかだということに。

男というのは——そういう男ばかりじゃないとしても——ある種、女にとって騙しやすい人たちで、エッチな話に頬を染めればこれは処女だろ

うとか、そういった馬鹿らしい基準を持っているものですから、女たちは結構、男を手玉に取ってきたけれど、こんな手玉に取って生きる人生が自分の人生として望ましいかどうか。経済的な問題を抜きにして考えると、そんな人生面白くないですよ。バージンらしく装って結婚にこぎ着けても、70年代だとその後はほとんどがパートタイムに行く。どこかに資料がありましたが、働く女の割合はフィンランドに次いで既に世界第2位だったんです。ですから働いて、自分でお金を握ってオシャレもするし、職場には夫以外の男もいるというところに70年代は来ていて、そこに私たちが出てきた。それで一層のこと自由に生きたいと思う女が増えていったのではないかと。答えになっているかどうか分かんないけれど、そんなふうでした。

酒井：そうだったんですね。70年代は、バージンらしく振舞うみたいなことから解放されていたのではないかと思うと、私たちの時代の方がつまらない時代だったのかもしれないと思って。

田中：バージンらしくするというのは結構重要だったんじゃないですか。結婚したい人にとっては。

酒井：処女じゃないと結婚できないという感覚は既になかった？

田中：なかったと思いますね。

酒井：私の時代もそうでしたが、でもその割に結婚できなかったんですけれど(笑)

田中：(笑) 勿論、人はそれぞれだから…。でもさつきも言っていたみたいに、男とか社会が望むように生きていけばいいんじゃない？という考え方は、まだまだ普遍性を持っていたと思います。

佐藤：最初に美津さんが歌ったお歌が、まさにそ

うでしたもんね。バージン餌に男をパクる。花の命は短いんだから、女らしさを武器にして。

田中：そう、そのものでしょう？

佐藤：そう思います。意外なところで負け犬と世代を超えたつながりを感じさせていただいて、ありがとうございます。小川さんもどうぞジャンプインしてください。

小川：いいですか。私は90年代の頃に女子高生だったんですけど、あの頃はルーズソックスを履いて「コギャル文化」といわれていて、酒井さんがファッションについて色々読み解く中で、あのコギャル文化は何だったのかなと、そこの分析を聞きたいです。今はコギャル文化が終わって、今の女子高生はルーズソックスとか履かなくなって、清楚系に戻っていますが、90年代に女子高生だった自分からすると、当時は女の子がかわいいと思つてルーズソックスを履いて、男の人からは「そんなの足太く見えるじゃん」とか言われていました。今の子は、AKB48から続く黒髪回帰とかで、清楚に戻って行ったのかなと。

あと、あの頃、援助交際のことをよくマスコミが取り上げていて、そのことに私はすごく腹が立ったのを思い出しました。バージンみたいな清楚を女性に求めるようなところがある一方で、90年代には「10代の女の子は、ブランドバッグ欲しさにみんな体売っているんだ」なんてことを言われて、そんなの一部にはいたかもしれないけれど、ただ渋谷を歩いて予備校に行く時に「いくら？」と聞かれたりとか、マスコミを鵜呑みにした人たちが女子高生に声を掛けていました。そういうところでもマスコミに対しては積年の恨みがあります。ルーズソックスについて、酒井さんにお話を聞きたいです。

佐藤：Q&A欄でも、現在の量産型女子ファッションについてどう思うか、これは解放的なファッションなんだろうかという質問が酒井さんに来て

います。

酒井：「量産型女子ファッション」というのは、何でしょうか？

佐藤：多分たまかさんが一番詳しいと思う、今仰つたようなAKB的な黒髪で、前髪ちよつと重めにしてみたいな、そういう感じ？

小川：あとネット上で言われるのは、就活の時もみんな同じような格好をして、黒髪で同じようなスーツを着て。比較すると70年代、80年代の女子就活生の方が多様性があったんじゃないか、みたいなのも言われていたりします。

酒井：確かに同級生で白いスーツで就活していた人がいて、それは今では全然考えられないことですよね。私達世代は、ルーズソックスで制服のスカートを短くするという流れの、源流にいるような気がします。私もチェックのスカートを腰のところで折り返して、ぎりぎりまで短くして、ハイソックスを履いて渋谷を練り歩いていたんです。それは何でかということ、先ほどブルセラ売文業と言いましたが、自分の若さが持っている価値に気づいてしまったから。我々より少し上の世代のツツパリの人たちは、大人っぽく見られたくてスカートを長くして、放課後は制服をコインロッカーに入れて新宿に行くみたいなのをしていましたが、そんなことをしていたらもつたいない、と。ぐるぐるパーマをかけるんじゃなくてサラサラの髪にして、足のソックスからスカートまでの「絶対領域」を見せながら若さをアピールしないと損なんじゃないかということに気付いたことによつてそれがチーマーになって、さらにそこからギャルに行くという流れかと。

ギャルまで行くと若さをアピールというよりはもつと突き抜けて、逆に男性受けしないファッション——ガングロ、茶髪みたいになっていったわけですが、元を辿ると若さのアピールにつながっています。それはまたツツパリ文化みたいなの

一種のバッドセンスですよ。全員が同じ格好をしている今時の就活生とは随分違う勢いがありました。

小川：ありがとうございます。

佐藤：あと美津さんにも、小川さん何か質問がありますか？

小川：ざくつとした質問になってしまうんですけども。60年代、70年代の女性たちのお話を聞くと、美津さんがそうだからかもしれないのですが、逆に自由だなみたいなの、言いたいことを言えているように思うところが少しあって。制度とかは時代とともに整って、見せかけの建前の男女平等は整ったからこそ、むしろ女性が声を上げやすく、ガチガチに周りを固められているような感じが私はちょっとして。美津さんから見て、今の20代、30代の女性はどういうふうに見えますか？幸せそうに見えますか？

佐藤：Q&Aでも美津さんに似たような質問があります。「現代の若者は声を上げることが非常に苦手だ。内に抱え込まれた欲望や情熱や意志に、形を与えるための方法をぜひ教えて欲しい」という質問です。

田中：私が聞きたいぐらいよ。さっきのご質問ですけれども、私、30代は少しいるけれど、それより若い人との付き合いが少ない。鍼灸院に来る人たちというのは、そこそこお金もかかるからあんまり若い人は来ないんです。だから具体的に若い人を見てといっても、あまり見てもいないしな…。どうして若い人に興味がないんだろうと今改めて思ったんですけど。

佐藤：でも美津さんは一時期、「リブを継承するのはヤマンバギャルだ」みたいな話もしていらっしやいましたよね。

田中：よく覚えていますね。でも言ってみただけで、あまり深くはないんです。ヤマンバがメディアからも女性たちからも、男は勿論でしょうけれど、袋叩きに遭っていたので、そうなると思っただけで、さっさとなくなっちゃうところがあるんです。だからそういうことを書いたと思うんですけど。実際問題、私はとにかく自分のぐるりの出会いの中からしか気持ちが向かない人間なものですから、20代、30代がどういうふうに見えるのか。皆さんに聞きたいわ。

佐藤：酒井さん、何かリプライがありますか？

酒井：私は、今の若者はすごくしっかりしていて、自分と比べると地に足が着いているというんですか。それは女性だけではないですが、特にフェミニズムのことを考えても、我々の世代は——世代と言っちゃいけないですね、「私は」ですけれども、さっきも言ったように世の中を変えていこうとか、変えたいという具体的な運動を起こしていないことが多い。ネットの影響もあるかもしれませんが、若い世代の方が意見を発信すること、行動をおこすことに慣れてますね。

佐藤：ありがとうございます。最後にQ&Aでまだ読み上げていない質問をいくつか紹介します。「現代では、女性の生き方といっても様々である。男性と同じようにバリバリキャリアを積み上げたり、専業主婦を望んだりと様々な女性たちがいる中で、その連帯を可能にするようなフェミニズムの在り方とは、どういったものなんだろうか」というご質問です。

それから「皆さん様々な価値観の方に出会うことがあると思います。自分と違う考えを持つ人のことを、どのように捉えていらっしやいますか」といった質問です。

大きな問いとしては、「このジェンダー状況、男女の不平等を、次の世代に持ち込まないようにするためには、どうしたらよいと思いますか」といったような質問もいただきました。

これで一応、第2部のパネルディスカッションはここまでとなりますので、上野さんにバトンタッチをして——

田中：佐藤さん、私、酒井さんが何か仰ると刺激を受けるのよね。いい？

佐藤：どうぞ、どうぞ。お願いします。

田中：若い人の問題を、あんまり詳しくないですけど私なりに思った時に、根本的な日本の構造が生産性第一というか、企業の生産性第一で成り立っちゃっている。男たちの長時間労働が少しずつは改善されていても、やっぱり諸外国と比べると酷い状態で。また夫婦としてコンビを組んでいる女の人たちも、母をやって、妻もやって、パートタイマーもやっているという状態。意識としては、ありのままの自分を生きるにはどう生きたら良いのかということが、私たちの若い時よりもずっと分かっている。だけれど、社会の構造としては、本当にがっちり古いまま。

この間コロナの問題で世界の人たちの対応してる姿を見た時に、女の政治家の人たちがものすごくいい対応をしていて、もう本当に男だとか女だとかという問題じゃないなあって思う。それに比べるとさっきの佐藤さんの数字は、もう涙も出ないぐらい酷いわけです。私たちの頃とどのぐらい変わっているの？と言いたくなるような。そんな中で意識だけは変わっちゃうということは、辛いだろうなというか、もつともつ若い人たちは取り乱したらいいんじゃない？と本当に思うのね。何とかそれに適応しようと思っちゃっているんじゃないか。でも、取り乱して当然なのよと言ってあげたくなっちゃうな。

佐藤：ありがとうございます。エールで締めさせていただきました。「適応するな、取り乱せ」、ということですね。ここで第2部を終えたいと思います。お三方、本当にありがとうございました。では、総括担当の上野千鶴子さんにバトンタッチし

たいと思います。お願いします。

上野千鶴子：こんにちは。上野千鶴子です。「総括」というのは、私たちの世代にとっては自己批判という意味でした。だから私はここで自己批判しなきゃいけないんですが、その自己批判のまず第一は、私は歌って踊ってができない、芸のない学者です。美津さんがのっけから歌を歌われたので、本当にびっくりしました。もしこれがタッカーホールであれば、タッカーホールに美津さんの歌声が響く歴史的な出来事で、皆さんから大拍手だったと思います。そういう歌も踊りもできないつまらない学者です。

美津さんが言った中で、「靖国の母、何とかの妻」というのは、たぶん「軍神の妻」じゃないでしょうか。一番大事な息子を戦地に送り、自分の愛する夫を死地に送るという、両方とも男を死地に追いやるのが女の役割という時代を私たちの先輩の女たちは生きてきました。だからこそ美津さんたちが切り拓いてきたリブの意義があるんです。

今日はお祝いだからと、「WANのないフェミニズムは考えられない」とまで言ってくださって。それがヨイショだとしても「WANのないフェミニズムは考えられない」と言われるようになりたいな、とは思っています。それでも最後に美津さんで、やっぱりリブとフェミニズムは違うと言うのよね。どこが違うかということ、フェミニズムは高学歴の大学の先生たちが何か難しいことを言っている、面白くないと仰いましたよね。はっきり言いますと、面白い学者と面白くない学者がいるだけです。わたしは面白くない学者でもうしわけありませんが、シンシア・エンローなんかはものすごく面白い学者だから、美津さんも食わず嫌いをやめてください(笑)。ね、佐藤さん。

酒井順子さんの書いた本だって面白いし、小川さんの書いたものだって面白いし、お2人は学者じゃないけれど、でも学者がいて調査研究をやってきたから、例えばセクハラ被害者はどれぐらいいるのかとか、女性のDV経験率が25%だと

か、DV妻はなぜ逃げられないのかとか、女の賃金が男性の7割にしかならない理由は何故なのかといったことを、いっぱい積み上げてきました。だからここは違うと言わずに、学者は学問というツールしかないのに他に芸がありませんけれど、「学者は学者なりにがんばってきたよね」ぐらいは言ってほしいです。これがまず反省の第一、芸のないフェミニストでした。

2つ目の反省。私は小川さんと酒井さんの報告を聞いて本当にショックでした。お2人とも立教OGですよ。立教で、お2人とも女子マネショックを経験なさったと仰いましたね。東大女子はインカレサークルショックという、東大女子の入れないインカレサークルがあることのショックを味わうようですが。お2人の話を聞いていてつくづく思ったのは、美津さんの話に出てきた「運動」とか「仲間」とかいう言葉が全く出てこなかったことです。

小川さんがフェミニに目覚めたのは、ネット上のクソリブによってだったと。「クソリブが私をフェミニにした」というのは、「平塚らいてうと同じだな」と思いました。平塚らいてうもぐるりのことから始めた人で、あの人はもともと「自分の内に潜める天才の開花」にしか興味のなかった人でした。ところが『青鞥』を出してみたら、男から猛バッシングを受けて、そんなにバッシングを受けるなら、じゃあ受けて立とうじゃないかと言って社会に目覚めたのが平塚らいてうさん。クソフェミと呼ばれるなら、じゃあクソフェミになってみようじゃないかというのは、なかなか面白いなと思いました。

酒井さんは酒井さんで、自分がつながりの中にあるということを感じたのは、歴史の勉強をなさったからと仰っていましたね。『日本の女の百年』は素晴らしいお仕事だと思いました。先ほどの『an・an』の分析も本当に素晴らしく、社会学だと思いました。では女の歴史を知らなかったら、そのようには感じなかったのでしょうか。

今回このテーマを選んだ理由は、リブとフェミニズムが歴史になったからです。日本のウーマ

ン・リブの誕生は1970年ですから、ちょうど半世紀たちました。半世紀前には、美津さんも私も若かった。その半世紀の間、リブやフェミの女たちが何をやってきたかということ、自分が自分であるために男の承認なんかいらないと、言ってきたはずなんです。美津さんだって今日、自分が自分であるために、男の承認なんかいらないとこのころに立っておられるはず。自分の価値は自分で作ると言って生きてきた女たちが、リブやフェミニストだったと私は思っています。

それが私の反省の2点目につながるのは、世代交代がうまく行かなかったということです。たぶん、小川さんも酒井さんも、70年代に田中美津という人がいたということをよくご存じなかったでしょうし、私も一部の人たちを除いてあまり知られていなかったと思います。雨宮処凛さんと対談した時にショックを受けたんですけど、大人になるまでにリブとかフェミニズムに全くかすりもしなかったと仰いました。上野の言葉も届かなかつたけれど、美津さんが「私たちの言葉なら届くと思った」と仰った言葉も、実は届いていなかった。若い人たちに、「フェミニズムってどこで知ったの?」と訊くと、ネットで知った、エマ・ワトソンの国連スピーチで知ったとか、韓国の活動で知ったとかいう答えが返ってきます。そこで「日本にもあつたのよ。そういう女たちがいたのよ、あなたが生まれる前に」と今ごろ言ってあげなきゃいけないのが、本当に悲しいというか、情けないというか。それが今日のテーマをわざわざ設定した理由の一つです。

このシンポの元々の目的は、リブから半世紀たったからこそ、現在フェミが変えてきたこと、変えられなかったこと、これから変えることを考えてみよう、それでこの3つのテーマを設定しました。変えたことに関して、私が言いたいと思っていたことが幾つかあります。その第一は、性暴力に対する社会的な許容度が低くなったことです。女の人たちが変えてきたんです。セクハラ、DV、それから「痴漢は犯罪です」となりましたし、家族の中の闇を暴きました。子どもの虐待も問題

になった。その虐待の中には、何とおぞましいことに性的虐待があることも分かったし、高齢者虐待もあることが分かった。どんなにそれに対する反動があったとしても、それを変えてこられたのは、やっぱり大きなフェミの成果だったと思います。それが今、#Me Tooとかフラワーデモにつながっているのだから、それらは前の世代の女たちが、いちいち声を上げてきたことの成果です。

もう1つ付け加えるとしたら、女性運動とは名乗らなかつたけれども、介護保険を作ったことが、高齢の女性たちの運動の大きな成果だったと思います。これが年寄りと子どもの関係を変えました。この点は歴史的に評価するに値すると思っています。

それと、美津さんが変えたことの中で、運動のスタイルを変えたと思つたのは全くそのとおりでと思います。それまで男の運動の目標は「革命」でした。革命というのは社会をひっくり返すとか取替えるという意味ですね。その「革命」が「自己解放」に変わりました。私を解放するのは私だけ、どんな運動も「私」からスタートするということです。当時はそういう英語は知らなかつたけれども、後になってみたら実はそう思つた女たちが日本だけじゃなくて、世界中にいたということが分かつて、「The personal is political」という標語が広がりました。

私たちも学問の世界で同じことをやってきました。私たちの前に「婦人問題論」というものがすでにありました。でも、「どうもこれって違うね。私のやりたいことじゃないね」と思つて、それで作り出したのが女性学です。女性学が登場した時には先輩の女の人たちから、「婦人問題論というものがあるのに、何でわざわざ新しいものに飛びついて女性学なんて作るのか」と嫌な顔をされました。何が大きく違うかということ、女性学は「私」から出発するということでした。女性学というのは、自分を自分の研究対象にしてもいいという、本当に眼からうろこの経験でした。同時代にリブのメッセージを受け止めて、大きな刺激と影響を受けた女たちが女性学に参入していったというこ

とは、ちゃんと認識しておいてほしいです。

次に、痛恨の思いで思い返すのが、「フェミニズムが変えられなかつたこと」です。何人の方が指摘されましたけれど労働の岩盤規制、つまり男の働き方を変えられず、女の働き方の条件がどんどん悪くなっていきました。なぜ酒井さんのいう「男尊女子」が減らないのかといえば、答えははっきりしています「男に取り入るとク。自分が努力するよりラク」という構造、つまり男が上げ底になった構造が半世紀以上続いてきて、私たちはこれを変えられませんでした。それが現状における日本の女性の地位の低さにつながっています。女の人たちがこれだけいろんなことに声を上げるようになったのに、日本社会の男の既得権構造を変えられなかつたことは痛恨の思いです。けれど、それは、敵がそれだけ強大だつたということです。

その次に、世代交代がうまく行つたかどうかということについて。私は以前リブの女の人たちに世代交代を考えていますかと聞いたことがあります。その人たちは何て言つたかということ、「そんなこと考えちゃいないわよ。私たちはいつでも現在でいっぱいだから。例えば自分が年を取ればそのつど起きてくる現在の問題に一生懸命取り組んでいるだけで、後から来る人たちはその背を見て、学びたければ勝手に学ばばいいのよ」と言い放たれました。それも一つの態度だと思います。

でも私たちは研究者です。研究者というのは同時に教育者でもあります。今日は20代の参加が大変多いと聞きました。立教の女子学生が沢山参加してくださつたと聞いておりますけれども、やっぱり次世代に私たちのメッセージを伝えたいと思つて、WANを作りました。その際の反省は、伝えるやり方、つまり芸が足りなかつたということです。学問の言葉しかなかつた。今日の私のこのバーチャル背景は友だちのデザイナーが作ってくれた千社札ですけれど、こういうデザインセンスのある女性とか、それからマンガを描ける女性とか、イラストを描ける女性とか、歌つて踊つてが

できる女性とか、そういう人たちがもつとフェミニズムのメッセージを送り出す担い手になってくれているなら、伝わり方も違ったかもしれません。そういう人たちはこれまでもいたと思うし、これからどんどん出てくると思うけれど、担い手の裾野がどんどん広がっていけば、ありとあらゆるところで、いろんなメッセージの出し方が出てくると思う。そうなれば、フェミニズムというのは小難しく面白くないとは言わせない、言われなくなるだろうと思います。

最後に、「フェミニズムがこれから変えること」について。私がもう変わったと感じる大きな希望は、若い女性が変わったということです。どう変わったかといえば、ガマンしない娘たちが育ったということです。20代の女の子を見てみると、男が女よりも優れているなんて思う女は、はつきり言ってゼロです。ものすごく自然な平等感覚を持った、そういう女の子たちがこの男が上げ底構造の性差別社会の中に入って行くのはきつだろうなど、美津さんが言うのもよく分かる。このガマンしない娘たち、こんなことあっていいわけがない、こんなセクハラをガマンする理由なんか何もない、お茶汲みを私がやらなきゃいけない理由なんて何もないと思う娘たち、こういう娘たちがこれだけ大量に層として登場してきたのは、日本の歴史のなかで大きな変化だと思います。それを育てたのは母親世代の女たちです。この母親世代の恨みつらみが、次の世代のガマンしない娘たちを育てたのです。今日の参加者の中には、20代から70代ぐらいまでとても幅がありますが、年長の女たちも社会の変化に貢献をしていると思います。

美津さんが、「私以外ではありたくない。私以上でもありたくない」と仰いました。どんな制約もどんな不自由もガマンしたくない、私は私でいたいという若い女性が育ってきました。けれども、本当は「私以外でも私以上でもありたくない」のは女に限らないと思います。男だって同じことを思っているんだよね。でも男は何でそういう声を上げないんだろう、何で運動しないんだろうと、私は不思議でしょうがない。「靖国の母・軍神の

妻」の隣には、死地に送られる男、そんなめに会いたくない男たちがいるはずなんだから、男たちも同じように声を上げて本当はいいはずだと思います。

こうやって既に変った女の人たちが、これから自分のパートナーを選ぶんだし、そういう人たちがこれから社会や企業に入っていくんだし、その人たちが男と社会を変えていってくれることを、とても期待しています。小川さんは自分たちの頭の上を飛び超えて、次の世代のガマンしない娘たちに先に行ってほしいと仰いましたが、まだ30代のあなたが言うには早すぎるよ。それは美津さんとか私のような高齢者が「老兵は消え去るのみ」で、次の世代に託すことです。私たちの世代がどういう責任を負っているかということ、若い人たちに「こんな世の中に誰がした」と言われたら「ごめんなさい」と言うしかありません。何もしなかったわけじゃない。社会を変えたいとがんばってきた。けれども非力で、ここまでしか変えられなかった。ここまでは変えたけれども、これ以上は変えられない。まだまだ課題は残っています。だとしたら、そこは私たちのメッセージが伝わるように伝えたい、いろんな芸を身に付けて、伝え方も工夫したいと思うけれど、それをちゃんと受け取って、あなたたちに、これから先の社会を変えていってほしい、そして自分らしく生きていってほしいと心から思います。今日の集まりがそのためのものだったとしたら、とても嬉しいです。以上です。ありがとうございました。

境：どうもありがとうございました。最後に閉会のごあいさつを、実行委員のお1人でWAN理事の、星野智恵子さんをお願いいたします。

星野：今日は長時間のご視聴ありがとうございました。ここには今、600人からの方々が集まっています。慣れないZoomでハラハラいたしましたけれども、リアルルの会場なら、檀上の皆さまのお顔はほんの豆粒ぐらいだったと思いますが、リモートのおかげで間近に拝見することができまし

た。貴重なお話を聞かせてくださったスピーカーの皆さま、本日は本当にありがとうございました。そして、この集いを支えてくださったスタッフの皆さま、とりわけ立教大学ジェンダーフォーラムのスタッフの皆さまには、心からお礼を申し上げますたいと思います。

現在、WANサイトに今日の動画記録を掲載するべく、関係者の皆さまと調整を進めております。実現の時にはサイトに告知いたしますので、どうぞもう一度ごゆっくりご覧になってください。立教大学ジェンダーフォーラムとWANは、これからもこうした催しを企画してまいります。再びこうして皆さまとご一緒できることを願って、本日の公開討論会を終了いたします。ありがとうございました。

境：ありがとうございました。これをもちまして、公開講演会「フェミニズムが変えたこと、変えられなかったこと、そしてこれから変えること」を終了いたします。本日は長時間にわたりご参加いただき、ありがとうございました。

